

# 東方古転録(凍結)

玖珂凌駕

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

歩いてたら、突然後頭部に衝撃がした。

そして、目を覚ますと知らない白い部屋にいた。

そこから、玖珂凌駕の新しい生活が始まるのだった。

# 目次

プロローグ	転生	1
1話	出会い	6
2話	新しい生活	10
3話	入隊	19
4話	模擬試合	27
5話	新たな家族？	31
6話	修行	37
7話	終わろうとする日常	43
8話	迫り来る敵	49
9話	防衛戦	54
10話	決着	61
11話	新たな力と出会い	69

12話	新たな始まり	77
13話	敵襲	85
14話	防衛大戦	93
15話	新たな真実	104
16話	水葉の修行	109



## プロローグ 転生

「んっ、こっちは」

目を覚ますと白くて何も無い部屋にいた。

勿論、俺が知っている場所ではない。

「何でこんな所にいるんだ」

俺はここに来る前の事を思い出そうとした。

確か、少し外の空気を吸う次いでに散歩をしていて、急に後頭部を鈍器で殴られた様な痛みがして……………気が失ったのか？

この事から俺は一つの考えが過った。

「もしかして死んだのか、俺」

「その通りだよ」

俺は独り言で言ったつもりだったが、返事が返ってきた事に驚き、声がした方を振り向くと、そこには一人の少女が立っていた。

少女と言うより幼女に近いが……………

「誰なんだ、あんたは？」

「私は神様よ」

「そうか。それで俺は何で此処にいるんだ」

「それは……………」

俺が質問すると何故か言いづらそうな態度をとっていた。

何か言ったらマズイ事でもあるのか等、色々考えていたら神様がやつと答えてきた。

「えつとね、手短に言おうと私のミスで貴方を殺しちゃった」

「そうか」

「あれ、驚かないの」

神様は思っていた反応と違った俺を見てキョトンとしていた。

まあ、あの事を聞いて驚かない方が少ないだろうが、俺は正直どうでも良かった。

「それで俺はどうなるんだ」

俺はこれからの事の方が気になり、神様に聞いてみた。

どうせ、閻魔様の所に行くのは変わらないのだからと思いつながら。

「単刀直入に聞くけど、貴方が居た所ではない所に転生してみない……………と云うよりして下さい」

と云って神様は此方に向かって頭を下げていた。

又もや、俺の予想の右斜め上に行き、何でそんな話が出てきたのかが分からなくて頭

を押さえていた。

「何でそんな事になったか説明してくれ」

神様は頭を上げ、分かったと言って頷いた。

「本来なら死んでしまうと閻魔様の所に行くのだけど……」

「俺はあんたのミスで死んでしまった」

「だから閻魔様の所には行けなくて、魂だけの貴方をここに呼んだの。でも、このままだと輪廻転生出来なくて消滅してしまう」

「だから転生してくれか。話は大体理解した」

俺は少し長めのため息ついて、聞いた話を整理しまとめてみると、ミスして死んだから転生して下さいって感じかな。

取り敢えず、元の世界よりも面白そうだな。

「それで転生しますか」

神様は何故か不安そうな顔で聞いてきた。

俺はそんなに嫌な顔でもしてたか、等と思いつつ返答をした。

「ああ、構わないぜ」

俺がそう答えるとさつきまで不安顔だったのが一気に明るくなった。

何これ、凄く分かりやすく面白。

「それじゃ、早速、転生の準備をするけど何か必要な物はある」

「そうだな……………俺が転生する場所ってどんな世界なんだ？」

そう言うのと神様は説明をしてくれたが、思っていたより長かったので、簡潔にまとめると昔の日本をファンタジーにした世界らしい。

そして、妖怪や神様までいて霊力・妖力・魔力があるらしい。

あと、能力を持つている奴もいるそうさ。

「それなら、能力と刀をくれないか」

「そんなので良いのか。それで希望はあるか」

「能力は『不可能を可能にする程度の能力』で刀は現世で持っていた物が良いな」

「刀の方は構わないけど、能力は……………」

そして神様は少し考えてたが、直ぐに話を始めた。

「能力の方はリスクが付くけど構わないか」

「どんなリスクなんだ」

そう言ったら神様は今度は簡潔に説明をしてくれた。

そのリスクは能力使用時の難題によって負荷の量が変わると言ったりリスクであるらしい。

まあ、この能力だどこの位が妥当だと思いを承した。



「んじや、早速頼むわ」

「その前にこれは私からのサービス」

そう言うのと神様は俺に向かって手を出してくると、自分の体が光りに包まれて数秒後には治まった。

「何をしたんだ？」

「ステータスと刀を強化しただけだよ。それじや、転生させるよ」

神様はそう言ってきたので、分かったて言って頷くと、神様は何かしらの詠唱を唱え始めると同時に自分の周りが光り始めた。

それから、神様が詠唱を終えると周りの光りが更に輝きを増し、俺は思わず目を瞑り、少し経った後に目を開けると、さっきまで居た白い部屋ではなく、見知らない森の中にいた。

# 1話 出会い

「転生していきなり森スタートか」

俺は警戒しながら周りを見渡したが、特に怪しい所は無かったので一つ息を吐いた。

「取り敢えず、人の居る場所を探さないとな」

そして森の中を歩き出した。

それから一時間が経とうとした時、何処からか聴いた事も無いおぞましい声が聞こえた。

俺は声が出た方を見たら、一人の女性が化物みたいな奴に追われていた。

「あれが妖怪って奴か」

此処に来る前に神様が言っていて、よく人を襲うらしい。

まあ、俺には関係無い事だが……………

俺はそう思いながら、その場を離れようと思った時、ふと思った事があった。

「彼奴を助けたら人の居る場所が分かるんじゃないか」

俺はそう言ったやさき、走り出していた。

「間に合ってくれよ」

そう言葉を残して…………

side

やらかした。

もつと警戒をしておくべきだった。

珍しい薬草を見付けたのは良かった。

採取中だったけど真後ろに来るまで気づかないなんて、警戒心が足りなかった。

早く迎撃をしたいけど、私の弓だと攻撃をする前に殺られてしまう。

「万事休すって奴かしら」

そう呟いた瞬間、木の根に足を取られてしまい転んでしまった。

「くっ」

直ぐに立ち上がろうとしたが、妖怪が目の前まで来ており、持っていた鉈を振り下ろ

そうとしたので、咄嗟に頭の前に腕を出して防御の体勢をとり目を瞑った。

しかし、幾ら待っても衝撃はこなず、代わりに妖怪の鈍い声が聞こえた気がした。

私は恐る恐る目を開けると、私の前に一人の少年が立っていた。

何で此処にいるのかと思うより、私は少年から出ている霊力の量に驚いた。

「ふう、なんとか間に合ったな」

く凌駕 sideく

俺は妖怪を追い掛けていたが、自分がこんなに速く走れた事に驚いていた。

「神様の奴、かなり強化してくれたみたいだな」

俺はそう言葉を溢した後、目と鼻の先に目的の奴等まで近付いていた。

だが、妖怪は女性に向かって鉞を振り下ろそうとした瞬間だった。

「ちっ」

俺はその場から全力で駆け出し、なんとか妖怪の攻撃を間一髪で防ぐ事が出来た。

刀を抜く隙は無く、鞘で防いだが……

そして、鉞を弾き妖怪の懐に蹴りをいれたら、鈍い声を少し出して後方にとんだ。

「ふう、なんとか間に合ったな」

俺はふうと息を吐き、抜刀の構えをとった。

妖怪の方は体勢を建て直してから、此方に向かって走ってきた。

けど、俺は妖怪の懐に一瞬で移動し、刀を抜いた。

「黒刀流『雷光の一閃』！」

妖怪は真つ二つになり、その場に力無く崩れ落ちた。

俺は刀を鞘に戻して女性の元に向かった。

「あんた、大丈夫か」

そう言いつつ、手を出した。

それと何処かで見たことのある人物だった。

「ええ、大丈夫よ」

女性は俺の手をとり、立ち上がった。

そして、服に付いた汚れを軽く払った。

「さつきは助けてくれて有難ね。私は八意 永琳。近くの街で主に薬剤師をやっているわ」

俺は名前を聞いて思い出した。

けど、俺が知っている永琳よりも若かった。

もしかして、此処は幻想郷がまだ出来る前の世界なのか。

「ねえ、聞いている?」

俺が色々と考え事していると、永琳の声でハッと現実に戻ってきた。

「悪い、少し考え事をしていた。それで何だ」

「貴方の名前は?」

「俺は玖珂 凌駕だ。宜しく」

そして、此処から俺の新しい生活が始まろうとした。

## 2話 新しい生活

「凌駕ね。それで何で貴方はこんな所にいるの」

永琳は名前を聞いた後、直ぐに質問をしてきた。

俺はこうなる事は予想はしていたが、もう少し後になると思っていた。

まあ、取り敢えず質問に答えるか。

「俺は旅をしているんだよ」

質問に答えるとは言ったが、嘘は付かないとは言っていない。

まあ、ちゃんとした理由はあるが……………

「そうだったのね」

これも予想外だ。もう少し疑うと思っただけど、追求されないなら問題ない。

「後、その量の霊力は何なの」

「えっ、霊力を感じるのか」

「えっ」

永琳も俺の答えに驚いたらしく、目の瞳孔がかなり開いた。

「もしかして、霊力を感じれないの」

俺は永琳の質問に首を縦に振った。

それを見た永琳はため息を吐き、呆れた顔で話を始めた。

「今まで、よく生きていられたわね」

「悪運は強い方なんだ」

俺は永琳の言葉にそう返した。

ちっ、嫌な事を思い出しちまった。

「取り敢えず、貴方はこれからどうするの」

「先ずは、人の居る場所を探すかな」

「なら、そこまで案内してあげる」

「良いのか」

俺は案内を頼む前に永琳から案内をしてくれるとは有り難かった。

「命の恩人だからね。これぐらいは構わないわ」

「それじゃ、次いでに霊力の感じ方も教えてくれないか」

「構わないわよ。歩きながらで良いかしら」

「問題ないぜ」

そして俺は永琳から街に向かいながら、霊力の事を学んだ。

永琳から聞いたことをまとめると、霊力は人が初めから持っているが大体は使える前

に死んでしまうらしい。

と言うより、気付かずに死んでしまうと言う方が正しいだろう。

それと霊力を感じるには意識を集中させ、自分の中にあるモノを感じ取る………  
まあ、瞑想みたいなものだろう。

取り敢えず、これが出来れば霊力を抑え込む事も練習すれば出来るそうだ。

「少しやってみるか」

俺は歩くのを止めて目を瞑った。

それから、数秒で霊力つぼいを感じる事が出来た。

永琳が言ってた通り、かなりの量が辺りに放出されていた。

(これが霊力かな。取り敢えず、こんな感じで抑え込めば良いのかな)

俺は霊力を自分の中に抑え込むイメージでやると、上手くいき放出されていた霊力は無くなった。

「これで良いのか」

俺は目を開けてから永琳に聞いた。

「ええ、問題ないわ」

永琳は驚きを隠せない様な声で答えた。

まあ、直ぐにこんな事をされたらそうなるよな。



「そろそろ行くとしようぜ」

「ええ、そうね」

そうして、俺達は街に向かつて歩き出し、少しの沈黙が続いたが永琳がそれを壊した。「そう言えば凌駕は街に行つてどうするの」

「まあ、暫くの間はそこで過ぐそうと思つてゐるつもりだが」

「なら、ツクヨミ様の許可がいるわね」

「ツクヨミ様つて？」

多分、日本神話の奴だと思つけど……………

「私達の街の創設者で神様よ」

「へく、神様か」

「あまり驚かないのね」

「まあ、ね」

それからまた沈黙が数分間続いた。

数分間歩いてみると木々の間から白い壁が見えた。

そして、それが見えたのと同時に永琳が口を開いた。

「もう少しで着くわよ」

永琳がそう言つて森を抜けると、白い壁に囲まれた建物等があり、壁の前に一人の兵

士が立っていた。

多分、見張りの兵士だろう。

「永琳さん、お帰りなさい。その後ろの者は」

「私の命の恩人よ。通して貰えるかしら」

「そうでしたか。どうぞ、お通り下さい」

そう言つて兵士は門を開いた。

門を通つた後、永琳が先ずは荷物を置いてからツクヨミ様の所に向かうと言つたので、俺はそれを了承した。

そして今は、ツクヨミ様の所にいる。

「と、言うわけなので凌駕を住まわしても良いでしょうか」

ツクヨミ様の元に着いてからは、永琳が事の事情を説明をしていた。

「うむ、別に構わないが住む場所がね」

ツクヨミ様は少し考え、答え始めた。

「なら、永琳の所に住むがよい。永琳、構わないか」

「ツクヨミ様がそうおっしゃるなら」

永琳はツクヨミ様の言つた事に驚いたが、直ぐに冷静さを取り戻してそう答えた。

「うむ、永琳は下がつても良いぞ。凌駕は少し残つてはくれぬか」

ツクヨミ様がそう言うのと永琳は失礼しますと言い、部屋を出ていった。

「それで何か用があるのか」

「単刀直入に聞く………お主が此処にいる間で良いから、軍に入ってはくれぬか」

「別に構わないが、何でだ？」

ツクヨミ様曰く、永琳を助けた時に殺した妖怪がかなり強いらしく、それを一撃で殺した俺の腕を見込んでの事らしい。

「それで話はこれで終わりか」

「最後に一つ。明日から軍事広場に行ってくれ。そこで訓練をしているからね。場所は永琳にでも聞いてくれ」

「了解した」

そう言うって俺はこの部屋から出ていき、近くで永琳が長椅子に座っているのが見えた。

「待ってたのか」

俺は永琳の元に近付いて、そう言った。

「ええ、それで何を話してたの」

「歩きながらで良いか」

俺はそう言うのと永琳は頭を縦に振ったので、歩き出してツクヨミ様に頼まれた事を話

した。

「んな訳で、明日から軍事広場に行く事になった」

「そう。取り敢えず、その場所の地図を書いてあげるわ」

「助かる」

それから、色々と話していると永琳の家まで着いたので中に入った。

「取り敢えず、凌駕の部屋は彼処ね」

俺は永琳が指を指した方を見ると、扉があつたのでそこに入ると、人が寝泊まり出来る位の広さはあつた。

そして、俺は刀を置いて座つた。

（取り敢えず、今までの事を整理しないとな。まず、此処は幻想郷が出来るかなり前の世界である事は確かだな。折角、此処に転生したんだから、幻想郷が出来るまで見てみないな。そうすると、不老不死にならないとな。でも、体格がまだ良くないからな………よし、3年後に能力で不老不死なるかな）

俺は整理が出来たので、一度部屋を出ようと立ち上がったたら、扉が開く音がしたので見てみると永琳が入ってきた。

「何か用か？」

「これを渡しに来たのと、今後の事をね」

永琳は俺に一枚の紙切れを渡され、見てみると軍事広場までの地図だった。それから、今後の事について話し合った。

特に家事の事についてで、この家にはあと二人が住んでいるが、一人はほとんど帰っては来なくて、もう一人は週に一回帰ってくる程度らしいので、家事は二人でやる事になるそうだ。

そして、永琳は家事の振り分けを話して、俺は料理関係とゴミ捨て係になった。

「んじゃ、早速夕食を作るとするか」

俺は立ち上がり、部屋を出た。

「台所は彼処よ」

永琳も俺が出た後に出てきて、台所の場所を教えてくれた。

俺は台所に向かい近くにあった冷蔵庫らしき物を開けると、野菜は生で食べれるものばかりで肉類等は惣菜だらけだった。

これを見た俺は、ため息を吐き必要な材料を出した。

それから、数十分が経つ頃には料理が完成し、机に並べた。

「これ、凌駕が作ったの」

匂いに釣られて来たのか、永琳が自分の部屋から出てきて、机を見て驚いていた。

「俺以外に誰がいるんだ」

「そうだったわね」

永琳は机の近くに座り、いただきますと言って食べ始めた。

俺も永琳の後を追うように食べ始めた。

「何これ、凄く美味しいんだけど」

「元は惣菜だったからな。不味くはないだろう」

「えっ、これって惣菜だったの」

永琳は驚いた様で、身をのり出して聞いてきた。

そんなに驚く事なのか、と俺は心の中で思ったが、冷蔵庫の状況を思い出して納得した。

「まあ、少し手を加えたただけだな」

それから、永琳に色々と言われたが流石に面倒だったので、ときとうに答えていた。

それで今は、布団が引かれた自分の部屋におり、一息ついていた。

「今日だけでかなり疲れたな。でも、明日からが楽しみだな」

そして俺は布団に入り、眠った。

### 3話 入隊

「もう朝か。朝食を作らないとな」

それから永琳と朝食を取り、軍事広場に向かう準備をした。

「もう行くのかしら」

俺が靴を履いていたら、永琳が話し掛けてきた。

「ああ、冷蔵庫に昼食を置いてあるから」

「分かったわ。いつてらっしゃい、凌駕」

「ああ（何時振りかな、この言葉を掛けられるのは）」

そうして、俺は紙切れを片手に軍事広場に向かつて歩き出した。

「此処か」

俺は目的地に着くと、此方に向かつてくる一人の女性がいた。

「君が玖珂 凌駕で良いのかな」

「そうだ。あんたは？」

「私は綿月 依姫。この隊の隊長を務めているものだ。宜しくな」

「ああ、此方こそ宜しく」

依姫が手を出してきたので、俺は手を取り握手をした。

「早速、訓練を始めるとしよう」

依姫はそう言って、俺を皆の前に連れてきた。

俺は軽い自己紹介をして、俺はこれから何をするのかを聞くと、先ずは走り込みらしい。

そして、それが始まって数分が過ぎた。

俺は走りながら、今後の事を考えていた。

(そう言えば、どれだけ走るか聞いてないな。てか、前の奴等遅すぎだろ)  
俺は前の奴等のペースで走っていたが、そろそろ嫌になっていた。

「取り敢えず、依姫の所まで行くか」

そして、俺は走るスピードを上げ、数分で依姫の後ろまで追い付いた。

「依姫、どれだけ走るんだ」

「えっ。凌駕さん、何時の間に……………」

かなり、驚いているみたいだったが、俺はそんな事は気にせずに、話を始めた。

「ついさっきだ。それより、どれだけ走るんだ」

「一時間走り続けて、ノルマは10 kmです」

「そうか、依姫はどれだけ走るんだ(案外、少なかったな)」



「20 kmですね」

俺はそれを聞いてそんなものかと思い、自分は先に行く事にした。

「んじゃ、先に行くな」

「えっ」

俺は依姫が変な声を出した事は気にせず走るスピードを上げた。

そして、一時間が経とうとした。

まず、驚いたのは少し後にいたが、依姫が俺のペースに着いて来た事と他の奴等はノルマしかこなしていない事だった。

本当に此処は軍なのか……………

「はあはあ、凌駕さんってかなり体力があるんですね」

俺が少し考えていたら、依姫が飲み物を渡しながら、話し掛けてきた。

俺はそれを受け取り、一口飲んだ後、依姫に言葉を返した。

「それなりには鍛えてたからな。それで、次は何をするんだ」

「少し休憩した後、模擬試合をします」

「そうか」

それから、依姫から色々と聞かされた。

取り敢えず、聞いた主な内容は置いて、次にやる模擬試験は作り物の武器を使う

らしい。

俺の場合は木刀だな。

(木刀を使うって事はあの流儀は使えないな。あつちの流儀を使うしかないか)

それから、休憩時間が終わり、木刀を取ってから相手を探してたけど、ほとんど奴等が相手がいた。

「なあ、俺と一戦しないか」

俺に話し掛けてきたのは大柄の男だった。

もつと詳しく言うのとド○クエに出てくるハ○サンに髪が普通に生えている男と言った所だ。

まあ、そんな事はどうでも良いか……

「いいぜ、俺も相手を探してた所だったんだ」

俺がそう答えるとニヤリと笑い、近くの空いている場所に歩き出した。

俺はその後に着いて行った。

「じゃ、早速始めるとするか」

そう言うと男は構え始めた。

男の武器は手には薄いグローブみたいな物を着けているので、多分、武術が出来る事が分かった。

そして、俺も木刀を構えた。

「先手はあんたにやるよ」

俺は挑発プラス様子見をするために男に向かって言葉を発した。

「後悔しても知らねえぞ」

男の方はこの言葉に苛ついたらしく、声のトーンが少し変わった。

そして、男は此方に向かって真つ直ぐ突つ込みながら、殴り掛かってきた。

俺はその単純な攻撃を避け、反撃をしようとしたがもう片方の腕で殴ってきた。

少し驚いたが、二撃目も軽く後ろに跳んで避けた。

「中々、やるな。でも、これならどうだ」

今度は乱撃をしてきたが、これも避けたり、木刀で受け流したりして防いでいた。

（スジは中々良いが、まだ粗いな。これから期待するかな）

「おらおら、手も足も出ないのか」

「そうだな。そろそろ反撃をしようか」

そう言つて俺は男の次の攻撃をした時に、避けながら懐に潜り、木刀で腹を攻撃した。

「ぐう」

男は少し後ろに飛ばされ、腹を押さえていた。

「中々、やるじゃないか」

「そりゃ、どうも。 んじゃ、次は此方の番だ」

そう言つて俺は剣道で良く見る構えをした。

けど、木刀は片手で持つているが……

「何時でも良いぞ」

男の方もボクシングの様な構えを取つた。

俺はそれを見て少しニヤつき、真つ直ぐ走り出した。

「雷閃流……」

俺がそう呟いたのと同時に男は殴つてきたが、最低限の動作で避けた。

そして、俺は反撃をした。

「……………電光石火」

が、男は攻撃を喰らわなかつた。

男が攻撃を避けた……………否、凌駕が寸土目をしたからだ。

男の方はこれには焦りの顔をしていた。

「ま、参つた」

そう言つると同時に男は尻餅を着いた。

まあ、目で追えない速さの攻撃を寸土目されたら、ビビるよな……………

「中々、良かったぜ。 またやろうな」

俺はそう言いながら、手を出した。

「ああ、俺も久し振りに格上の奴に会ったよ」

男は俺の手を握り、立ち上がった。

「あんた、名前は何て言った」

「凌駕、玖珂 凌駕だ」

「凌駕か。俺は剛力 翼だ。宜しくな」

「此方こそ宜しく」

此処で俺達は改めて握手をした。

そして、少し翼と話した後、次の相手を探すため別れた。

それから、3人ぐらいと模擬試験をして、少し疲れたので休憩をしていた。

当然、試合は全勝だ。

「凌駕さんってかなりの手練れなのですね」

俺は声のした方を見るため、首だけを動かして声のした方をみた。

「依姫か。見てたのか」

「ええ。それで私と試合をしてくれませんか。真剣で」

「構わないぜ。俺もあんたとやってみたかったんだ」

「それでは、早速向かいましょう」

そして、依姫が歩き出したので、立ち上がり後を追うように、着いて行った。

## 4話 模擬試合

「へえ、こんな所があるんだな」

依姫の着いて来たら、広い空間に連れて来られていた。

「此処は特殊な力で出来ている場所でも多少、荒事をして大丈夫な様に造られている」

「そうか。んじゃ、早速始めようか」

俺はそう言いつつ距離を取り、刀を構えた。

「そうですね」

そう言うのと依姫も刀を構えた。

（流石に隊長をやっているだけ有って隙が無いな。取り敢えず、真っ直ぐに突っ込んでみるか）

俺は依姫に向かって走り出し、刀を左下に構え直した。

依姫は俺の行動に何もせず、刀を構え続けていた。

多分、俺の攻撃に合わせる為だろう。

「なら、これで行くか。雷閃流『怪力乱心』！」

この技は威力を目的としたモノで速さはあまり無いが、様子見としては丁度良い技

だ。

「甘いですね」

依姫は俺の攻撃を最低限の動作で避け、右足を軸にして回転攻撃をしてきた。

「綿月流『三日月』！」

俺は後ろに跳んで避けたが、懐の服が少し斬られていた。

（もう少し反応が遅かったら、腹が真つ二つになつていたな）

「彼処から避けるとは意外でした」

「まあ、このぐらいは出来なかつたらアイツの相手は出来なかつたからな」

俺は刀を一度強く握りしめ、依姫に向かって走り出していった。

今度は速さをメインに連撃を繰り返したが、依姫はいとも簡単に避けていた。

それだけではなく、時々反撃をしてきたが、俺も何とか避けた。

「中々、やるな。依姫」

「これでも隊長ですから」

そう言いながら、攻撃をしてきたので、一度距離を取った。

「なら、これはどうだ。雷閃流……………」

そう言いつつ、全力で走り右下に刀を構えた。

依姫はさつきまでと変わらず、此方の動きに合わせる様に刀を構えた。



「……………電光石火」

俺はこの流儀で最速の攻撃を放った。

が、依姫には届く事はなかったが、今までとは違い刀で防がれていた。

「ははっ、この攻撃まで防ぐとは予想外だったな」

「いえいえ、私も結構ギリギリでしたよ」

そう言った後、刀で押し返してきたので、後ろに跳んだ。

依姫はああやって言ったが、顔は涼しげな顔をしていたので、まだ余裕がありそうだ。

「はあ、この流儀だと勝てないか」

そして俺は、刀を鞘に納めた。

「もう降参ですか」

「いいや、型を変えるだけだ」

そして、俺は抜刀の構えを取った。

「抜刀術ですか。そんなので私に勝てますか」

「やってみないと分からないが、これは唯の抜刀術だと思ふなよ」

俺は言い終わった後、依姫に向かって走り出した。

依姫はこの行動に少し驚いていたが、直ぐに冷静さを取り戻した。

まあ、驚くのは当然だよな。

普通、抜刀術は相手の行動に合わせて出す技だからな。

「黒刀流『雷光の一閃』！」

この技は速さに長けたもので、抜刀から入るので、『電光石火』よりも速い攻撃になっている。

それでも依姫はこの攻撃を間一髪で受け止めた。

俺はそれを見た瞬間、一瞬力を弱めると依姫は少し体勢を崩したので、刀を逆手に持ち直して右足を軸にして攻撃を仕掛けた。

「黒刀流『機龍の鉤爪』！」

「綿月流『孤月』！」

俺が攻撃を放った瞬間、そのような声が聞こえた。

そして、勝負の結果は俺の刀は依姫の首元に依姫の刀は俺の懐に寸土目であった。引き分けだった。

## 5話 新たな家族？

「ははっ、強いな。久し振りに勝てなかったな〜」

俺はその場に倒れ込み、色々と考え込んでしまった。

近くに依姫が居ることを忘れるぐらいに。

（やっぱり、中途半端な流儀だと極めている奴には勝てないな。今回は運が良かっただけで、次にやったら確実に負けるな）

凌駕が使った二つの流儀はまだ未完成でとても実戦で使えるものではないが、凌駕自身の力量で何とか形になっているものだ。

「……………凌駕さん、大丈夫ですか」

俺は依姫が声を掛けている事に気づいて、考えいた事を頭の隅に置き、起き上がった。

「大丈夫だ。少し疲れただけだ」

「そうでしたか」

そう言い終えた後、依姫は少し上の方を見ていたので、俺もその方を見ると時計があり、時間は12時を回っていた。

「もうこんな時間ですか。昼食の時間ですね」

依姫がそんな事を言っている時、俺は取り敢えず刀を鞘に納めた。

「凌駕さんは先に食堂に行っていて下さい。私は隊の皆を呼んで来るので」

そう言うのと依姫は走り出し、入ってきた入り口から出ていった。

てか、食堂の場所を知らないだけど……

「取り敢えず、誰かに聞いてみるか」

俺は歩き出し、その部屋をあとにした。

依姫つて案外、天然なのか。と思つた事は本人には内緒である。

それから、俺は運が良く食堂の場所を教えてもらい、10分ぐらいで着く事が出来た。中に入ると翼が俺を見付けた様で手を振っていた。

よく、この人混みで見付けられたな。

そして、翼の所に行き、椅子に座つた。

俺は翼に何が合ったかを聞かれたので、翼と別れた後の事を話した。

勿論、依姫と戦つた事も……

それを聞いた翼はかなり驚いていた。

翼から聞いた話だが、依姫はこの街でベスト10に入ると言われている位、強いらしい。

それから、俺達は昼食を食べ終わり、午後の訓練を受け、今は依姫と一緒に帰ってい

る。

まあ、帰路が一緒なだけだが……………

それで、依姫は普段は軍の寮で生活しているけど、週1で帰っているらしく、丁度今日がその日だった。

でも、同じ様な話を聞いたけど、まさかな……………

「そう言えば、あの流儀は何ですか。急に動きが変わってびっくりしましたよ」

「あれは黒刀流って言って俺の独自の流儀だ。だけど……………」

「だけど、どうしたんですか」

俺は言葉を濁して、話そうとしなかったが依姫が追求する様に聞いてきたので、話す事にした。

「黒刀流、それと雷閃流、どちらもまだ未完成なんだ」

この事を聞いた依姫はかなり驚いていた。

しかし、少し深呼吸をして気持ち落ち着かせていた。

「それで俺から頼みが有るんだが、聞いてくれるか」

「何ですか？」

「俺に修行をつけてはくれないか」

「私なんかで良いんですか」

依姫は少し驚いていたが、さつきよりは大丈夫な様でそう聞き返してきた。

「依姫以外には頼めそうにないからな。頼めるか」

依姫の顔が少し赤みが増した。

けど、凌駕はそんな事には気付く事はなかった。

「私で良ければ、お受けします。但し、流儀が完成したら、手合わせをして下さいね」

「やっぱり分かっちゃったか」

「はい、何と無くですけど」

これが剣士の勘って奴なのかな。

それから、修行の場所や時間を決めた後、俺達は雑談をしながら帰路を歩いていた。

数分経った頃、もうすぐ永琳の家に着くな、と思った時、依姫が俺に質問をしてきた。

「凌駕さんってどの辺りに住んでいるのですか」

俺は少し悩んだが、依姫なら大丈夫だと思い、永琳の所に居候をしている事を話した。

次いでに森であった事も。

「……………と言うわけで今は永琳の所に居候させてもらってる」

「えっ!？」

依姫は瞳孔が限界まで開き、口をポカンと開いていた。

かなり驚いている様だった。

「依姫、大丈夫か」

そう言うのと依姫は、ハツと我に返り、そして走り出していった。

「ちよ、待てて」

俺も依姫を追い掛ける様に走り出した。

てか、依姫走るの速すぎないか。

そして、依姫を追い掛けていると、依姫は永琳の家の中に入っていった。

俺もその後が続いて入ったが、そこには永琳の両肩を掴んでいる依姫の姿がいた。

何かを問い質している様だった。

「あら。お帰りなさい、凌駕」

「お、おう。ただいま」

「話を反らさないで下さい。何で凌駕さんが此処に居候しているんですか!」

「ちゃんと説明するから、少し落ち着きなさい」

その言葉を聞いた依姫は永琳の両肩から手を離し、少し離れた場所に座った。

俺も中に入り、空いている場所に座った。

「取り敢えず、簡潔に話すわよ」

そう言つて永琳は此処までの経緯を話した。

勿論、森であつた事も含めて……………

「成る程。取り敢えず、話は分かりました。では、これからよろしくね、凌駕さん」  
「ああ、此方こそよろしくな」

こうして、もう一人の住人は依姫と分かり、これからの生活が賑やかになるのだった。



## 6話 修行

「もう朝か」

俺は布団から立ち上がり、伸びをして体を伸ばした。

そう言えば、昨日は大変だったな。

料理を作っただけで依姫に驚かれたり、永琳にお酒を飲まされそうになったり……

普通は最低限の料理ぐらい出来るだろ。

まあ、この話はまた今度にしよう。

依姫を待たせるわけにはいかないからな。

そして、俺は刀を持って、部屋を後にした。

「凌駕さん、おはようございます」

「おはよう、依姫」

「では、行きましようか」

「そうだな」

そして、俺達は近くの広場に行き、修行を始めようとした。

「先ずは雷閃流の特徴を教えてくださいませんか」

「簡潔に言おうと『雷』だな」

それから、俺は雷閃流の流儀の事を話した。

この流儀は雷の様に速く、破壊力がメインだけど、バリエーションが少なく臨機応変に戦う事がまだ出来ない。

また、型もまだ不安定で隙が多い。

「大体は分かりました」

それから、依姫は少し黙り込み、数秒たった後に口を開いた。

「取り敢えず、地盤を完璧にしましょう」

「分かった。少し試したい事もあるからな」

そうして、お互い鞘から刀を抜き、構えた。

「あく、負けた負けた」

俺はその場に大の字の様に横になった。

あれから、依姫と一時間位戦ったが、一勝も出来ず完敗だった。

俺は力の差があるとは感じていたが、此処まで差があるとは正直思ってもなかった。

「でも、少しずつ動きにキレが出て、技も幾つか形になっていたと思うよ」  
「そう言ってくれると嬉しいな」

依姫が手を出してきたので、俺はそれを掴んで立ち上がった。

そして、両手を組み少し伸びをしてこれからの課題を頭にまとめた。

「取り敢えず、朝食を食べに戻るか」

「そうですね。私も少しお腹が空きました」

俺達は少し雑談をしながら帰路を歩き始めた。

この時に依姫からアドバイスを聞いたりして、幾つか試したい技を思い着いたので、次の時に試してみようと思った。

あれから、三年の月日が経ち俺は今、白い部屋の中に居る。

「もう三年か。時間が経つのは速いもんだな」

俺はこの三年間でかなり実力がついた。

雷閃流が完成し、今では依姫と互角に戦える様になり、霊力もかなり上がった。

けど、依姫達は俺の霊力は人並みだと隠している。

それと翼が能力を持っている事を知った時は驚いた。

たしか、『強化する程度の能力』だ。

勿論、俺の能力については誰にも話してはなく、今まで一度も使った事もない。

そして、この部屋は訓練に使う場所で、防音対策がされているので、中の音が漏れる事はない。

「んじゃ、そろそろ始めるか」

俺は少し深呼吸して、次の台詞を述べた。

「能力発動。不老不死になる事を可能に」

そう言った瞬間、今までに味わった事も無い激痛が走った。

例えるなら、全身の筋がズタズタにされている感じた。

そして、俺は痛みに耐えられなかったのか、視界がブラックアウトした。

「んっ、んっは」

俺が目を覚ますと見知った天井が目に入り、近くには永琳と依姫が居た。

「凌駕さん！目が覚めたんですね」

依姫は今にも泣き出しそうな表情で言ってきた。

「悪い。心配をかけたな」

「本当よ。それできちんと言明をしてくれるかしら」

永琳がそう言ってきたので、あの部屋で合った事を話した。  
勿論、嘘の事を……………

「つてな訳だ」

二人は俺の話を聞いたら、呆れた様な表情をしていた。

それもそうか、難易度マックスの訓練を一人でやったと言ったからな……………全て嘘だ  
けど。

「はあ。凌駕さん、貴方って人は」

依姫はため息をし、その場に立ち上がった。

「そろそろ、時間なので行きますね。後は頼みます」

「ええ」

依姫はこの部屋から出ていき、少しの沈黙が続いたが永琳が話し始めた。

「それで、本当はどんな無茶をしたのかしら」

俺はそれを聞いたとたん、やっぱり永琳には隠し事は出来ないなど心の中で思った。

「本当は俺の能力のリスクのせいなんだ」

「えっ、能力!？」

永琳は俺の言った事にかなり驚いていたが、すぐに気持ちを落ち着かせ、話し始めた。

「どんな能力なのかしら」

「不可能を可能にする程度の能力で、リスクは難題により負荷がかかる事だ」

「成る程ね。つまり、そのリスクのせいで倒れたって事ね」

「そうなるな。正直、ここまでとは思って無かったよ」

それから、永琳に色々と聞かれたので答えれる範囲で答えた。

それと、永琳からも話があると云ったので、その話を聞いた。

内容はあと数年で月に行くから、一緒に行かないかとの誘いだったが、俺はそれを断った。

永琳も理由までは聞いては来なかったが、少し悲しい顔をしていた。

「分かったわ。それじゃ、ゆっくり休むのよ」

「ああ」

永琳が部屋から出ていったのを見たあと、俺は再び眠りについた。

## 七話 終わろうとする日常

あれから3日が経ち、俺はようやく永琳からの許可が出たので、依姫と一緒に軍事広場に向かっていった。

道中は依姫と他愛も無い話をした。

目的地に着くと翼が此方に気付いたらしく、此方に走ってきた。

「三日ぶりだな、凌駕。話は依姫から聞いたぜ。随分と無茶をしたらしいな」

「まあ、な」

「そうだ。久し振りに手合わせをしようぜ」

「後で相手になるよ」

それから、いつも通りにウォーミングアップをして、約束通り翼と手合わせを始めようとした。

「病み上がりだとしても容赦はしないぜ」

そう言うのと左足を半歩後ろに下げ、拳を構えた。

「あれぐらい何でも無いさ。だから全力で掛かってこいよ」

そうやって俺は刀を構えた。

初めに動いたのは翼で此方に向かって跳んで、拳を振り下げた。

俺は後ろに跳躍をして翼の攻撃を避けた。

翼の拳は俺が居た場所に大きな窪みが出来ていた。

まともに受けたら、一溜まりもないだろうな。

しかし、翼の攻撃はこれだけでは終わらず、此方にまた跳躍をしてきた。

さつきより速いスピードで……

俺はさつきの様に避けようとしたが、翼も読んでいた様で一撃ではなく、連撃をくり出した。

だが、これは予想の範中だったので苦なく、捌くことが出きるが、このままだとじり貧になると思い反撃をしようとした。

が、翼はこれを待っていたかの様に攻撃のスピードを上げた。

俺は不意を突かれた攻撃だったので、避ける事が出来なかったが、刀を盾にし、何とか直撃は免れたが勢いは殺せず、そのまま後ろに飛ばされた。

「くっ」

俺は空中で体勢を立て直し、追撃をケアする行動をしたが、翼は空中ではなく着地と同時に攻撃をした。



「これでも喰らいやがれ！烈火掌」

俺は自然に笑みを溢した。

やっぱり、こうじゃないと面白くないよな。

「雷閃流『雷斬りー流電ー』！」

この技は相手の攻撃を受け流しながら反撃をする技だ。

「おっと」

翼は紙一重でかわしたが、少し体勢が崩れたので、俺はそこを狙って翼の鳩尾に蹴りをいれた。

「ぐっ」

翼は後方に飛んでいったが、何事も無かった様に体勢を整えた。

多分、能力で自分の防御力を上げ、俺に蹴られる寸前に後方に跳んで衝撃を抑えたのだろう。

あの一瞬でやり遂げるとは、やっぱり翼は強いなと思うのだった。

「やっぱり強いな、凌駕」

「俺なんて未々さ。んじゃ、今度は此方から行くぜ」

俺はそう言うと、腰を落とし刀を持っている右手を左腕辺りで構えた。

「雷閃流『雷斬り……………』」

俺は普通目では追うことが出来ないスピードで翼の目の前まで跳んだ。

「……………雷光ー！」

俺は構えていた刀を横一線に振り斬った。

だが、翼には簡単に避けられてしまった。

しかし、此処までは俺の読み通りに事が進んでいた。

「雷閃流『雷斬りー雷牙ー！』」

刀を振り斬った勢いを利用して、その場で回転をして左上から斬り降ろした。

「ちっ、俊足術」

俊足術。数秒間、音速に近いスピードを出すことが出来るが効果が切れたとき、一瞬

隙が出来る。

俺はそこを狙い、技を放った。

「雷閃流『雷斬りー稲妻ー！』」

この技は高速でステップをし、相手を斬り抜ける技だ。

だが、今回は模擬戦なので寸土目をした。

「降参だ」

翼はそう言うとその場に倒れ込んだ。

「今回は俺の勝ちだな」

「そう言えば、永琳さんからあの話を聞いたか」

「月移住計画の事か」

「そうか」

俺はこの時、あの事を言うかどうか迷ったが翼には、言っておこうと思った。

「実は翼に言っておきたい事があるんだ」

「んっ？なんだ」

翼はその場から起き上がり、不思議そうな顔をしていた。

「俺は一緒に月には行かない事にした」

これを聞いた翼は瞳孔が限界まで開き、驚きの顔を隠す事は出来てはいなかった。

それから、気持ちを落ち着かせる為か深呼吸をした。

「色々と聞きたい事はあるが凌駕がそう決めたなら止めはしないぜ」

「翼ならそう言うと思つたよ」

実際はかなり追求されると思つた事は黙っておこう。

「残りの時間もよろしく頼むぜ」

翼はそう言うと同時に拳を此方に向けてきた。

俺はそれを見て少し笑みを溢し、翼の拳に俺の拳を合わせた。

「ああ、言われるまでも無いさ」

それから、俺は翼に依姫にはこの事は内緒にしてほしいと頼んだ。

流石に理由を聞かれたが、それを答えると翼は迷うことなく了承してくれた。

それから翼と少し雑談をしていた。

「そろそろ昼食でも食べに行くか」

「そうだな」

俺達はその場をあとにし、食堂へと向かった。

そして、数年の月日が過ぎていった。

この数年間では沢山の思い出を作ることが出来た。

ドラゴンみたいな奴の討伐や妖怪の襲撃など、大変だった事も合ったが、それ以上に楽しかった事も合った。

しかし、当たり前だった日常も終わりを告げようとしていた。

今日は計画実行の当日なのだから………

## 八話 迫り来る敵

「朝か」

俺は横にあつた時計を見るともう10時を廻つていた。

「流石に寝過ぎたな」

俺は体を起こし、旅立ちの準備を始めた。

数分後、ある程度準備が整つたので、刀を持ち部屋をあとにした。

「あら、随分と遅い起床ね」

部屋から出ると、永琳が声を掛けてきた。

俺は永琳の前に座り、さっきの返答をした。

「またには良いだろ。どうせ、今日は軍の仕事は無いんだし」

俺はそう言った後、お茶を湯呑みに入れて飲み始めた。

「まあ、良いわ。今のうちにこれを渡しておくわ」

そう言うのと永琳は此方に向かつて棒状の物を投げ渡してきた。

俺はそれを受け取り、詳しく見てみると頭の方にスイッチがあつた。

「何なんだ、これ」

「それは簡易シールドを張れる機器よ」

「何でこんな物を渡すんだ」

永琳は何か言いにくそうだったが、暫くしたら話始めた。

「実はロケットの発射後、爆弾を落とす事になっているの」

「なるほど、もしもの時の保険みたいなものか」

永琳の話を聞いてこれを貰った経緯はわかったが、爆弾を落とす意味があまり分からなかったが、ツクヨミの事だ、何かしらの考えがあるのだろうと思い、俺は深く追求はしなかった。

「まあ、そんな所よ」

「なら、有り難く貰っておくよ」

それからは他愛も無い雑談を数十分間、話していた。

そう言えば、依姫を見てないなと思い、永琳に尋ねた。

「依姫を見ないけど、何処に居るんだ」

「彼女なら、見張りの手伝いに行つたわよ」

「随分と働き者だな」

そう言いつつ、お茶をすすった。

今更だが此処のお茶は俺がいた世界よりも美味しいんだよな。

「凌駕はもう少し働いた方が良いじゃないかしら」

「まあ???'」

俺が話を続けようとした時、危険を報せる鐘が街中に鳴り響いた。

俺と永琳はすぐに外に出て、街の様子を見た。

外に出ると街の人達がロケットに向かって走っていた。

俺は一人の民間人を呼び止め、話を聞いた。

「何があつたんだ」

「南の方から妖怪の軍勢が此方に向かって進軍しているんだ」

「ありがと、引き止めて悪かったな」

その男は俺がそう言うと、再びロケットに向かって走っていた。

俺は永琳の近くに行き、話をした。

「永琳、今からロケットを発射するにはどれぐらい掛かる」

「そうね、一時間位かしら。そんな事を聞いて、まさか!？」

永琳はこの時、何かを察した様で俺の腕を掴んできた。

「そのまさかだよ。ロケットの発射まで俺が時間を稼ぐ」

「無茶よ。一人でなんて……………」

「大丈夫だ。俺を誰だと思っている」

永琳も理解してくれた様で掴んでいた手を放してくれた。

「そうだったわね。『雷神卿』とまで呼ばれるぐらいなものね」

雷神卿……………。

俺がこの街に住み始めて5年になろうとした時、ツクヨミから貰った二つ名みたいなものだ。

と、当時は思っていたが実際はツクヨミがこの街で強者と認めた者だけが貰えるもので、俺以外に依姫と翼も持っている。

依姫は『月花』、翼は『岩砕』の二つ名だ。

「んじゃ、そっちは頼んだぜ」

「そっちこそ、間違っても死ぬんじゃないわよ」

俺はその言葉を聞くと、妖怪の軍勢が向かって来ている南門に走り出した。

門に近づくに連れて逃げていく人は少なくなり、爆発音等の戦闘音が段々大きくなつた。

(戦闘音がするって事は誰かが戦ってるわけだな。大体は予想が出来るが少し急ぐか)俺はそう思い、走るスピードを上げた。

少し時間を遡り、南門の見張り台では……………。



「依姫さん、そろそろ交代の時間です」

「もうそんな時間か」

依姫は最後に一通り外を見渡した時、妖怪の軍勢が此方に向かつて進軍していた。

依姫はこれを見ると交代の見張りに警報の鐘を鳴らすように伝えた。

見張りの兵はすぐに鐘を鳴らしに降りていき、依姫はそれを見た後に刀を持ち、見張り台から降りていった。

依姫が門の前に来るまでに鐘が鳴り響き、妖怪の軍勢を目視出来るまで、近付いていた。

「オー、あれはかなりの量だな」

「翼か」

「よつと、あの数を二人で相手するには少し厳しいな」

そう言いながら、翼は城壁から飛び降り、依姫の近くまで歩いていった。

「でも、私達しか止められる人はいないけどね」

「分かってるさ。取り敢えず、片っ端から潰すまでだ」

そう言うのと、二人は敵の方へと体を向け、軍勢に向かつて走り出した。

## 九話 防衛戦

「はあはあ、数が多すぎるぜ」

「そう……………ね」

始めは優勢に戦えていたがやはり多勢に無勢、二人は疲労が見え始め、段々と敵を捌けなくなり徐々に後退をしていった。

それから戦い続けたが、妖怪の進軍を止める事は出来ず、今では門の前まで来ており、防戦一方だった。

敵の数は五十万の四割近くも残っていた。

「万事休すって感じだな」

「でも、諦める訳にはいかないわ」

それを聞いた翼はそうだな、と思い気合いを入れ直した。

それからは迫り来る妖怪を一匹ずつ確実に倒していくのだった。

そして、時間軸を戻して凌駕の方は……………

「よっと」

城壁の上に昇り終えていた。

何故なら、登った方が時間がかなり短縮出来るからだ。

「んじゃ、さっさと向かいますか」

そう言うのと凌駕は、今出せる七割の速さで走り出した。

そのため、凌駕が通った後には暴風が起こり、足で踏んだ所には窪みが出来ていた。

流石に街中だと、これだけの速さを出す事は出来ないからな。

数分後、南門が見えてきて戦つてゐる二人の姿も見えない様だ。

が、凌駕が見た二人は疲弊しており、防ぐのでやつとの様だった。

それを見た凌駕は刀を抜き、その場から全力で前方に跳んだ。

そして空中で刀を構え、刀に靈力を載せた。

「雷閃流特式『雷斬りー雷閃ー』！」

俺が刀を振ると幾つかの斬撃が敵の方へと翔んでいった。

この技は靈力を斬撃として放つもので、目に見える鎌鼬と思つて貰えると分かりやすいだろう。

そして、俺が放つた技は門に近い妖怪から当たつていき、俺は二人の前に着地した。

「来るのが遅かつたな、凌駕」

「そのぶん、きちんとして働かせ」

二人の方を見るとかなり疲弊している様で、俺はその後にごう告げた。

「二人は少し休んでな。あとは俺がやる」

二人も了承したので、俺は敵の方へと目を向けて刀を下段に構え、体勢を低くした。

「雷閃流『雷斬りー稲妻ー』！」

そう言った後、いつの間にか敵の下真ん中におり、通つたと思われる道筋には沢山の妖怪が倒れていた。

この技は走りながら敵を倒す単純なものだが、速さが尋常ではなく、例えるなら稲妻が起きる並みの速さだろう。

妖怪達は何が起きたのか分からず、此方を警戒していた。

俺は一度刀を振り、妖怪達に剣先を向けた。

「さあ、妖怪ども。何処からでも掛かってきな」

この言葉を聞いた妖怪達は奇声を上げて此方に向かって襲ってきた。

俺は襲ってきた妖怪達を一匹ずつ倒していった。

そして、10分ほど経つた頃、流星に少し疲れてきたがまだまだ妖怪の数は残っていた。

(コイツ等はどう見ても下級妖怪だ。下級妖怪は知能が低く、集団行動はしない。けど、コイツ等は集団で襲ってきた。誰かコイツ等を纏めている奴がいるのか)

少し考えてたせいか、後ろから襲ってきた妖怪に気付かず、気付いた時には回避は間に合わないので、防御の体勢をとった。

しかし、妖怪の攻撃は俺には届かず、背後からの攻撃で地に倒れた。

「油断大敵ですよ、凌駕さん」

そこには休んでいる筈の二人が立っていた。

「もう良いのか」

「ああ。全快とは言えないがコイツ等を倒せるぐらいは回復した」

「そうか。んじゃ、さっさと妖怪どもを倒すとするか」

俺がそう言うと同時に妖怪達に攻撃を始めた。

三人が揃ったことで妖怪達は次々と倒され、あっという間に数は全体の一割となった。

あと一息、といった時に前方から大きな岩が飛んできた。

俺はそれを十字に斬った。

その瞬間、岩を斬って出来た隙間から角が生えた妖怪が此方に向かって殴り掛かってきた。

俺は突然の事だったので回避が間に合わず、刀と左腕で攻撃を受け止めた。

「ぐっ」

が、威力が強すぎて受け止めきれず、後方へ飛ばされた。

「凌駕さん!？」

「凌駕!」

二人はそう叫ぶと同時に此方に向かってきた。

「大丈夫か」

「ああ、なんとかな」

心配してきた翼の言葉にそう答えた。

(アイツの攻撃、かなりヤバイな。左腕は痺れて当分、使い物にならないな。それにアイツから感じる妖力は俺の霊力より尋常じゃないな。二人を逃がすなら今しかないな)

そう思った俺は二人に声を掛けた。

「俺が時間を稼ぐから二人はロケットの所へ行ってくれ」

「それだと凌駕さんが……………」

俺は依姫の言葉を遮る様に話し始めた。

「心配するな。少し時間を稼いだら、すぐに追い付くさ。それに俺には奥の手があるから」

何か言おうとした依姫だったが、翼が彼女の肩に手を置いた。

依姫も悟ったらしく、これ以上は止めようとはしなかった。

「絶対に戻ってきてよ」

「ああ、分かっている」

これを聞いた依姫は先に門の方へと向かっていった。

翼は俺の肩に手を置き、耳元で死ぬんじゃないぜ、と言ってきたのでああ、後の事は任せたと答えた。

そして、翼も門の方へと向かっていった。

俺はそれを確認した後、角が生えた妖怪の方へと目を向けた。

「律儀に待ってくれるとはな」

「なぐに、あんたとサシで戦って見たいと思っただけさ。ただ、コイツ等は行かせるさ」

妖怪達は角が生えた妖怪の合図と共に門の方へと向かおうとした。

俺は妖怪達を止めようとしたら奴が動いてくると思い、能力を使うことにした。

能力発動と小さな声で呟くと妖怪達を取り囲む様に結界が張られた。

「へえ、対したものだね。これは少し予想外だったね」

「まずは下級妖怪を倒すとするか」

俺はそう言うのと、今まで抑えていた力を解放し、能力を使った。

そして一瞬で残っていた妖怪を全て倒した。

ただ、能力の使用で俺の体はかなりの負担が掛かっていた。

「さあ、妖怪あとはあんただけだ」

「これがあんたの全力か。さっきまでとは大違いさね」

「ご託は良い。さっさと始めようぜ」

こうして、凌駕と角が生えた妖怪との一騎討ちが始まろうとした。



## 十話 決着

二人の一騎討ちが始まってから、既に数分が経っていたがお互いに攻撃を喰らっておらず、均衡状態が続いていた。

しかし、俺は違和感を感じていた。

俺の攻撃は簡単に避けられるのはまだ良いが、アイツの攻撃は俺の弱点ばかり攻撃をして、何とか避けていた。

(もしかしたら、何かしらの能力を持つてる可能性があるな。それだと、俺に勝ち目はほとんどないな)

戦いながら、そんな事を思っていると、またもや一瞬の隙を突いてきた。

俺はそれを何とか避け、一度距離を取った。

「あんたの力はそんなものかい」

挑発かただ戦いを楽しみたいのかは分からないが、俺は刀を構え直して攻撃の準備をした。

「なら、俺の技を見せてやるよ」

そう言って、妖怪の方へと走り出した。

近付いてきた俺に攻撃を仕掛けてこず、迎撃の体勢を取っていた。

俺は気にせず、妖怪に向かって連撃を仕掛けたが、簡単に受け流されたが一瞬の隙を見逃さずに技を放った。

「雷閃流『雷斬りー轟雷ー』！」

この技は他の技よりスピードが無い分、威力が桁外れの技だ。

しかし、妖怪の足元には大きなクレーターが出来ていたが、いとも簡単に攻撃を受け止めていた。

「中々の破壊力だな。でも、鬼の私に力で勝負したのは愚かだね」

奴がそう言うのと反撃をしてきた。

俺は咄嗟に後方に跳躍し、奴の攻撃を避けた。

そして、俺が居た場所にはもう一つの大きなクレーターが出来ていた。

さらに、そのクレーターは俺が作ったものよりも大きかった。

この事から、俺は奴には力では勝てないと悟った。

しかし、まだ手は残されているので、再び奴の懐へと飛び込んだ。

「雷閃流『雷斬りー雷光ー』！」

だが、これも簡単に受け止められてしまった。

そして、奴も反撃をしてきたが、さつきよりも速く避ける事は出来なかった。

「くつ。雷閃流『雷斬りー流電ー』！」

俺は何か攻撃を受け流し、奴から距離を取った。

「はあはあ」

（流石にヤバイな。パワーでもスピードでも駄目だと打つ手がアレしか無くなるな。でも、アレを使うのはまだ早いし、最後まで抗ってみるか）

「もう終わりかい。あんたの本気がこの程度とは拍子抜けだね」

「そうやって油断していると足元を掬われるぜ」

俺はそう言って奴に向かって走り出し、刀を逆手に持ち変えた。

奴はこの事は気にせず、地面を殴った。

そして、殴った箇所を始めに地面が物凄いスピードで割れていった。

俺はそれを横に跳躍して避け、攻撃を仕掛けた。

「雷閃流『雷斬りー雷星ー』！」

この技は連続で高速に斬り抜ける単純な技だが、他の技と繋げやすい特徴がある。

だが、奴には効かずに簡単に避けられてしまっていた。

やはり、このままだとじり貧だと思ひ、刀を逆手から持ち直し、違う技を出した後にアレを使うことにした。

「雷閃流『雷斬りー迅雷ー』！」

この技は斬り抜ける前に連撃を放ち、時間差で攻撃が当たる技だ。

分かる者はあるゲームのボールズって言うキャラの必殺技に似たものだ。

これには奴もすぐに対応は出来なかったが、防御だけはされてしまった。

「さっきのは少し効いたね」

「無傷の奴に言われたくはないな」

渾身の一撃とは言わないが本気で斬ったのに、無傷なんて流石に勝てないわ。

けど、こんな事で諦める訳にはいかないの、最後の悪足掻きをする事にした。

「まあ、あの程度で傷は着かないさ。多少のダメージは喰らうがね」

そう言う、奴の周りの空気が変わり始めた。

俺はそれを感じると、すぐに距離を取り、刀を構え直した。

あのままでと殺られると感じたからだ。

「余興は終わりだ。此方にはやる事が沢山あるからね……………あんたには此処で死ん

で貰うよ」

奴がそう言い終わると、姿が見えなくなり、気付いた時には目の前にいた。

攻撃を仕掛けて来たが、俺は攻撃を防ぐ事が出来ずに奴によって心臓を貫かれた。

「がはっ！」

俺は口から血反吐を吐き、奴はすぐに腕を抜いた。

俺はその場に倒れ込み、それを見た奴は先へと進んでいた。そして、俺は意識が暗闇へと堕ちていった。

「黒刀流『龍神の逆鱗』！」

俺は油断していた奴の隙を突いて後ろから攻撃をした。

そいつは急な事に対応出来ずに俺の技を諸に喰らい、結界の方へと吹っ飛んでいった。

「死ぬかと思っただぜ。いや、一回死んだか」

そう言いつつ、俺は刀をもう一度刀を鞘へと戻した。

それとさっきの技は威力重視の抜刀術だ。

まだ未完成の流技だが……

「どんな手品だ。確かに私はお前の心臓を貫いた筈だが」

奴はその場に立ち上がりながら、質問をしてきた。

奴の体には無数の傷が出来ており、少しは血が出ていた。

「それは俺が不老不死だからだ（やっぱり此方の技の方が扱い易いな。早く完成させないとな）」

奴の質問に答えつつ、他事を考えていると奴は話し始めた。

「成る程ね。でも、あんたは私には勝てないよ」

奴の言う通り今のままだと勝ち目は無い。

だから、俺はアレを使うためポケットから一枚のカードを取り出した。

「ああ、そうだろうな。けど、これを使ったらどうだろうな」

「なんだね、そのカードは」

流石に奴も見慣れない物に少し警戒していた。

「これは俺の力がやどったカードだ。んじゃ、いくぜ。解放『デッドヒート』！」

そう言った途端、俺の体が軋む感じがしたが、関係無く刀の柄を握った。

それと、奴にはああ言ったが実際の所、まんまスペルカードなんだよな……

「さあ、最終ラウンドといこうじゃないか」

「なら、此方は戦意喪失するまでお前を殺し続けるまでさ」

こうして、二人の最終決戦が始まった。

二人が闘い始めてからかなりの時間が経っていた。

二人の姿はボロボロで、息があがっていた

アレを使つたうえ、能力のリスクによるダメージにより凌駕の体はもう限界になつていた。

しかし、奴は多少のダメージは喰らっているが、俺よりは軽かった。

それに、結界の維持も限界がきており、所々ひびが入っていた。

これ以上、続けるとヤバイと思い、俺は奴に提案をした。

「次の一撃で決着を着けようとしようぜ」

「そうさね。此方としてもそれが有難い」

奴も決着を着けたいらしく、すんなり了承した。

そして、お互い相手に向かつて走り出した。

「喰らいな。我王絶怨吼」

「いくぜ。黒刀流『森羅万象の理』……………!?!」

この時、俺の体はアレによつての反動が受け、上手く攻撃が出来ずに奴の攻撃を諸に喰らつてしまった。

その攻撃で俺は吹っ飛んでいき、結界に体を打ち付けられた。

この衝撃で結界は砕け散つてしまった。

俺は何とか体を起こして、刀を杖がわりにして立ち上がったが血反吐を吐き、意識は朦朧としていた。

すると、遠くからロケットの発射音が聴こえた。

俺はその音を聴いて少し安心し、此方に向かつてくる妖怪に話し始めた。

「あんた、此処から離れた方が良いぜ。死にたくなかったらな」

「あんた、何を言っているのさ……!!!」

奴は何が起こるのか悟つたらしく、その場から離れようとした。

多分、それが奴の能力なのだろう。

けど、数歩歩くと足を止め、此方に向かつて話し掛けてきた。

「そう言えば、あんた名前は。私は雨宮 百鬼さね」

「俺は凌駕。玖珂 凌駕だ」

それを聞いた百鬼はまた歩きだし、森の中へと消えていった。

俺も此処から離れようとしたが、思ったより体が動かず近くに合つた大きな岩に背中

を預けた。

「永琳にこれを貰つてて良かったな」

俺はポケットに入っていた機械を取り出し、スイッチをいれた。

そして、目の前が真っ暗になり、意識は暗闇へと堕ちていった。



# 十一話 新たな力と出会い

「んっ、此処は何処だ」

俺が目覚めると見覚えの無い真つ暗な場所にいた。

場所と言うより空間と言った方が正しいか。

「おっ、やつと目が覚めたか」

俺が周りをキョロキョロしていると突然、後ろからとても聞き覚えのある声が出た。

声のした方に振り向くと俺に似た者が立っていた。

「あんた、誰だ」

「俺か。俺はお前だ」

俺はその言葉を聞いて、ある程度理解した。

アイツは俺の闇の部分だと……

そして、闇の人格がやる事と言えば定番の体の所有権を奪うことだろうと思い、戦闘体勢を取った。

俺の行動を見たアイツはフツと笑みを浮かべたので、この行動で俺の考えを察したのだろう。

アイツも戦闘体勢を取ると思い、アイツの動きを集中して見ていたが、動く気配がなかった。

そして、今まで黙っていたアイツが話し始めた。

「そんなに警戒すんなって。俺はお前と闘うつもりは無い」

「はっあ!?!」

アイツの突然の言葉に驚いたが、闇の俺がこんな事を言うとは思わず変な声が出てしまった。

この言葉を聞き、戦闘体勢は崩したがまだアイツの事は信用出来ないで、警戒は怠らない様にした。

それを見たアイツはやれやれと言ったポーズを取り、話を始めた。

「まあ、単刀直入に言うと大切な人を作らない方が良いぜ」

アイツは真剣な顔でそう言った。

俺はアイツが何でこんな事を言ってきたのかは大体、分かっているが俺はアイツの言うことは聞けないな。

「嫌だ、と言ったら……………」

「そうだな」

そう言い終えると同時に、アイツは俺の目の前まで一瞬で移動し、拳を向けてきた。

俺は警戒してたにも関わらず、アイツの動きに反応する事が出来なかつた。

せめてダメージを抑えるため、受け身が出来る様にした。

が、アイツの拳は俺の胸の部分を軽く叩いただけだった。

「なら、そいつ等を守るだけの強さを身に付けろよ……………あんな思いは二度としたくないからな」

俺はコイツの行動に戸惑っていたが、この言葉を聞いて完全に理解する事が出来た。

コイツは俺の闇だが、元々は俺の一部だ。

俺の考え、俺の気持ち、感じている事は一緒だ。

ただ、違うとすれば秘めている感情だけだろう。

まあ、今のコイツは自我が芽生えて俺の考えいる事とは違うだろうがな。

一緒だったらこんな事にはならなかつたしな。

そして、奴が俺の顔を見るとニヤリと笑みを浮かべ、後方へと一歩下がった。

「やっつと、理解してくれたみたいだな」

「ああ」

コイツは俺に、今のままだと誰も守れない事を伝えようとしていた、だけなんだと

……………

「んじゃ、後は頼んだぜ。面倒事は任せた」

と良い顔で言ってきた。

俺はそれを聞いて、今までの考えが変わった。

コイツはただ単に、面倒事を押し付けようとしているだけじゃねーか。

何、今までの事は全部、これだけの為にやっていたのか。

俺のシリアス返せよ。

「そうだけど……」

「あれ。声に出てた」

「ガッツリと出てたぜ」

俺は手で顔を押しさえ、頭から湯気が出てきた。

マジで此処に穴があつたら入りたい。

「まあ、勘違い誰にでもあるって」

アイツは今にでも笑いだしそんな顔をして、俺に追い討ちを掛ける様に言ってきた。

「うるせえ、お前は黙ってる」

俺はそう言って、ソイツに拳を振り落とした。

だが、アイツは拳を簡単に受け止めた。

「落ち着けて。面倒事を押し付けようとしたのは本当だが、お前の考えいた事は間違いないぜ」

奴はさつきまでのふざけた態度ではなく、真剣な顔で言ってきた。

俺もそれを見て本気だと思い、拳を下ろした。

「なあ、お前って本当に俺の闇なの」

「そうだけ。ただ、普通とは少し違うかな」

「それはどういう事だ？」

「それはだな……おっと、そろそろ時間のようだな」

アイツがそう言うと、俺の体が透けてきた。

俺もこの現象を見て、多分現実の俺が目覚めようとしているのだろう。

けど、その前に少し用事を済ませないとな。

そして、俺はアイツの胸の辺りに拳を当てて、能力を発動させた。

「何をしたんだ……!? フツ、成る程な」

アイツは俺の行動に疑問を持っていたが、自分の中のアレを感じたのだろう、納得した顔をしていた。

「あと、これからはお前は白夜だ。名前が一緒だと面倒だからな」

「白夜か。良い名前だ」

アイツもとより白夜がそう言うと、体がほとんど透けた状態になっていた。

「んじゃ。頑張れよ、凌駕」

「ああ」

俺がそう返事をするのと同時に姿が消えていき、意識が現実世界へと戻って行くのであった。

「っん、此処は」

俺は現実世界で目を覚まし、周りを見ると俺が知っている場所にいる場所だと思っていたが、全く知らない場所だった。

と思っていたが、よく見ると見覚えのある人工の壁があった。

かなり年月が経っている感じだが……………。

取り敢えず、俺はどれだけ寝ていたのか、能力を使ってみた。

「能力発動」

そう口にすると頭の中に数字が浮かんできた。

俺はその数字を見て驚いた。

まさか、約二億年の月日が経っていたとは……………。

流石にこれだけ寝ていたら、何かしら体に異常があると思ったが特に何も無く、逆に霊力の量がヤバイ事になっていた。

さらに、今まで感じたことの無い力が自分に宿っている事にも気付いた。取り敢えず、放出されている力を抑え、これからの事を考える事にした。

「まずは、何処か修行出来る場所を探さないと」

そう言えば、此処には地下施設があつたよな。

もしかしたら、使える施設が残っているかもしれないと思い、地下への入り口を探した。

少し時間がかかったが、何とか地下への入り口を見付ける事が出来た。

そして、運の良いことに一つだけ使える施設が残っており、修行にうってつけな施設だった。

一先ず、此処を拠点とする事にした。

「まず、この力が何なのか知っておかないとな」

そして、俺は能力を発動しこの力の正体を知った。

それは魔力であつた。

俺はこれを知った時は喜んだが、翌々考えてみるとまだこの時代に魔法は存在しないのでは無いかと……。

再び能力を使い、魔力について知ったが案の定、まだこの世界には存在していなかった。

けど、俺は魔法が使ってみたくないので、修行がてら魔法を使える様にする事にした。流石に人前では使わないが……………」

「つつ……………少し能力を使い過ぎたらしいな。」

俺の体に少し電気が走る様な痛みがしたが、動けなくなる程では無いので、魔力の使い方を練習する事にした。

「ふう〜」

さつき能力で得た知識を見てみると、先ずは魔法適正を知る必要があるらしい。

方法は霊力と同じ様なので早速やってみた。「えつと、適正は火、雷、氷に聞か」  
属性相性とかは後回しにして、次は魔力を出してみるか。

魔力は自分の体内にあるもので、出したい部位に魔力を集めると出せるみたいだ。

「おつ、出来たな」

そう言うのと、手の平に火の魔力が出てきた。

「取り敢えず、前に投げてみるか」

そして、俺は魔力を前に飛ばしたが、少し進んだ後に消えてしまった。

「まあ、初めてにしたら上出来だろう。一先ずは黒刀流を完成させないとな」

こうして、俺の修行と新たな生活の幕開けとなるのであった。



## 十二話 新たな始まり

あれから、何百年の月日がたっただろう。

五百年からは覚えてないな。

まあ、そんな事はどうでも良いだろう。

今では、あの時よりもかなり強くなった。

そうだな、何故かバーチャルバトルが出来る施設のデータにあつたツクヨミと互角に闘えるまでにはなつた。

かなりのプロテクトが合つたので実行するのにかなり手間が掛かつたが……。

それに実際のツクヨミ自身の実力だつたら分らないしな。

それから、霊力は化け物並みに増え、神に匹敵する位になつた。

黒刀流も完成させ、雷閃流の方も色々と技を増やしていった。

黒刀流も未々、増えていくだろうな。

それと魔力の方は残念ながら、量を増やす事は出来なかつた。

魔力量は自分の精神の器で決まり、それは産まれた時から決まっているらしい。

まあ、魔法は使えるので別に問題はない。

けど、消費量の多い魔法はあまり使えない事がかなりの痛手だ。

何故なら、魔法を使うにはセンスが必要で、俺には魔法のセンスがあまり無く、今まで試してみたがその通りで、俺が使えたのはレーザー系魔法と憑依魔法（エンチャント）の二つだけだった。

まあ、何も使えないよりはマシだったけど……。

他にも沢山のスキルを身に付ける事が出来た。

一つ例を挙げるなら、覇気だ。

この世には三つの覇気が存在し、一部の者しか修得出来ないものだ。

一つは王道の覇気。この覇気は多の者を自分達の意志で従わせ、あらゆる者を引き寄せる事が出来る覇気で、簡単に言ってしまうえばカリスマが高いだけだ。

しかし、その高さが尋常ではなく、敵でも味方にする事が出来る位だ。

二つ目は覇道の覇気。この覇気は恐怖により支配し、あらゆる者を寄せ付けない覇気であり、俺が得た覇気である。

最後に外道の覇気。この覇気は自身の野望の為に他者の人格を壊し、自分の操り人形へと作り替える事が出来る覇気だ。

字のごとく、外れた道だ。

まあ、ほとんどの奴は王道か覇道の覇気を身に付けるらしいがな。

他にも色々なスキルがあるが、今は別に良いだろう。

そろそろ、出発の時間だ。

「一通りやりたい事は出来たし、久しぶりに外へと行くかな」

それから、数分で身支度を済ました。

今の格好は黒のズボンに無地の白服にフード付の黒いコートを着ている。

髪型は後ろ髪は首元まであり、前髪は左目を隠せるほどある。

後は説明が面倒なので、ご想像に任せるとしようか。

「後は此処を破壊するだけだな」

そうして俺は右手に雷の魔力を集めて、それを装置に向けて放った。

その後、装置は次々とショートし、爆発していった。

ただ、威力が強すぎたのか爆発の衝撃で地下全体が崩れ始めた。

「やっべ」

俺は完全に崩れる前に脱出しようと荷物を持ち、地上に出れる階段に向けて走り出した。

そして、何とか地上へと出る事が出来た。

此処に入る前は綺麗な森だったので、森に出ると思っていたが、予想外な事に真っ暗な場所に出た。

俺は左手に魔力を集め、火の玉を出して辺りを見渡した。辺りの状態から恐らく、洞窟の中だろう。

多分、俺が地下に隠っている間に地殻変動が起きたのだろう。

まあ、幸いな事に入口が塞がれてなかっただけマシだったな。

「念のため、此処は塞いでおくか」

俺は右手に魔力を溜め、入口付近の天井に向けて放った。

今度は上手くいき、入口は完全に閉ざされた。

「んじゃ、出口に向かうとするか」

俺は空間に亀裂を開け、荷物をその中にへと入れた。

これは魔法の一種で魔力があれば誰でも使える無属性魔法である。

この魔法は空間を操る魔法だが、これにもセンスが必要なので俺には空間に物をしまっておく位しか使えない。

何処そのネコ型ロボットの四〇元ポケットに似ているな。

そして地下への入口から反対方向に歩き始め、出口へと向かっていった。

幸運な事にこの洞窟は分かれ道が無く、此処に住んでいた魔物達は覇気のおかげで襲っては来なかった。

そして、数十分で入口までたどり着いた。

入口から光が見えた辺りで見られると不味い、火の玉を消して洞窟を後にした。

一瞬、日の光りで視界が妨げられたがすぐに視界は戻った。

辺りを見渡して見ると、此処は山の頂上より少し下辺りで禁は森になっており、近くに村が見えた。

「まずはあの村に行ってみるか、瞬迅！」

このスキルは音も無く、高速移動するものだ。

アサシンの隠密行動を高速でやっている方が分かりやすいかな。

そして、山の禁まで数秒足らずで移動した。

「此処からは少し歩いてみるか」

このまま村まで行っても良いのだが、誰かに見られたら面倒だし、折角の旅だから景色を楽しみたいしな。

それから暫く村のある方向へ歩いていると、何処からか女性の叫び声が聞こえた。

俺はその場に立ち止まり、辺りを見渡すとかなり遠いが魔物に襲われている人を見つけた。

距離は此処からは大体、1 km位だろうか。

「瞬迅・轟」

俺は普通の瞬迅では間に合わないと思い、1段階ギアを上げた。

この上にも烈と爆があり、轟は3割、烈は5割、爆は8割の力となっている。参考程度に普通は1割程度の力で使っている。

そして、移動しながら空間を開けて刀を取り出し、抜刀の構えをした。

魔物との距離は数秒で無くなった。

「雷閃流『雷切りー神雷ー』！」

この技は今の所、唯一の抜刀術で本来は敵が領域に来るまでの待ちの技だが猶予がなかったので無理矢理、領域に入れた。

精度は落ちるが、この程度の魔物なら十分だろう。

そして、魔物を斬り抜け刀を鞘に納めた後に魔物はその場に崩れ去っていった。

俺は刀を一度、空間にしまい襲われていた女性に近付いた。

「大丈夫か？（あれ、誰かに似ている様な……）」

そう思いつつ、女性に手を差し伸べた。

彼女はお礼を言いながら、手を掴み立ち上がった。

「本当にありがとうございました。それで貴方は何か能力を持っているのですか」

俺は一目見られただけでバレると思わず、少し驚いた。

多分、彼女に嘘を付いてもすぐにバレると思い、正直に答えた。

「まあ、持っているな」

それを聞いた途端、彼女の目に光が灯っていた。

「もしかして、神様かそれに関わる人ですか」

彼女は何を思つて、こんな事を聞いてきたかは分からないが、俺は彼女の間に答えた。

「いや、俺はただの人間だが」

「本当ですか!？」

彼女はかなり驚いた様で、物凄い勢いで聞いてきた。

俺はそんなに驚く事か、と思いつつも彼女に返答をした。

「ああ、本当だ」

「私、神様かそれに関わる人以外で能力を持っている人は初めて見ました」

「それはどういう事だ？」

彼女は俺の言つた事がそんなに変だったのか、不思議そうな顔をしていた。

「そのままの意味ですよ。能力者は神様かそれに関わる人だけですから」

俺はそれを聴いて、今の時代は複数の神が中心として成り立っている、といった仮説にたどり着いた。

まあ、俺の仮説が合っているとは限らないが、神様関連なのは間違いないだろう。

「でも、もしかしたら他にも要るかもしれませんね」

「そうだな。そう言えば、まだ名乗ってなかったな。俺は玖珂 凌駕、旅人だ」

「そうでしたね。私は東風谷 水葉、守矢神社の巫女をしています」

俺は彼女の名前を聞いて思い出した。

彼女は東風谷 早苗に似ていたので多分、祖先に当たるんだろう。

もしかしたら、諏訪子や神奈子に会えるかもしれないな。

「それで凌駕さんはこの後、何か予定はありますか」

「いや、特に無いが」

「それだったら、私達の村に来ませんか。助けて貰ったお礼もしたいですし」

「それじゃあ、お邪魔しようかな」

「分かりました。此方ですよ」

俺は水葉の案内のもと、道中雑談をしながら彼女の住んでいる村へと向かっていった。



## 十三話 敵襲

水葉の案内のもと歩いてみると、ものの数分で森を抜ける事が出来た。辺りを見渡すと前方に村があることが確認出来た。

そして、村の前へと着くと見張りの二人が声を掛けてきた。

「水葉様、お帰りなさいませ。収穫の方はどうでしたか」

「ええ、バツチリですよ」

「それで後ろの男は」

見張りの奴は何気無く聞いていたが、明らかに此方を警戒していた。

俺が答えようとしたが、先に水葉が声を発した。

「この人は私の命の恩人です。なので此処を通して良いですよね」

「そうでしたか。なら、通つても構いませんよ」

「有難うございます。凌駕さん、行きますよ」

「ああ」

こうして何も問題なく村の中へと入ることが出来た。

もし、俺一人だったら通れなかったかもしれないな。

それにしても、流石に警戒し過ぎだと思うんだが、何か合ったのか。

「先程はすみません。いつもだったら普通に通して貰えるんですけど」

俺はこの発言でこの村に何かがあった事を確信し、気になったので少し聞いてみる事にした。

「何か合ったのか」

水葉は少し悩んでいたが、暫くして口を開き、話し始めた。

「数日前に大和軍が来て、村を明け渡さなければ戦を仕掛ける、と言ってきて今まさにその最中なのです」

「そうだったか」

「でも、今の所は特に大きな戦は無いので、暫くは安全ですよ……つとこの階段を上げば守矢神社ですよ」

その階段は俺が転生前の世界でも見た事のない程の長い階段だった。

「長いな」

そう無意識に小さな声で呟くと、それは水葉に聞こえてたらしく話し掛けてきた。

「最初は皆そうですけど、馴れたら何とも思いませんよ」

水葉がそう言い終えると、階段を登り始めた。

俺は小さなため息を吐いて、水葉の後を追うように階段を掛け上がった。

そして数分後に、やつとの思いで階段を登り終えた。

この階段を登りきるのは、流石に足腰に負担が掛かった。

まあ、対した事ではないがな……。

それから、水葉に案内されるまま神社の中に着いていった。

「此処で少し待っていて下さい」

「ああ」

水葉はそれを聞くと、襖を閉めて違う部屋へと向かっていった。

俺が案内された場所は、この神社の居間らしき所で此処から見える庭は立派とは言えないが、かなり綺麗な所ではあった。

取り敢えず、俺は卓袱台があったのでその近くに座り、部屋の中を見渡していると、暫くして襖が開かれた。

「あんたが水葉を助けてくれた人間かい」

開かれた襖の方を見てみると案の定、そこには守矢 諏訪子がいた。

ただ、俺が知っている服装とは少し違っていた。

「ああ、そうだが」

「水葉が世話になったね。私からも礼を言わせて貰うよ」

「別に対した事はしていないさ。それに立ってないで座ったらどうだ」

「そうだね、と諏訪子が言う。俺の正面へと座り、水葉はその隣へと座ったら、

それと諏訪子は何故か此方をずっと見ていた。

少しの間沈黙が続いたが、暫くして諏訪子が話し始めた。

「それにしても、あんたからは魔物を倒すだけの霊力を感じないのだけど」

そう言われると、俺は怪しまれても困ると思ひ、霊力を一割解放した。

それにしても、諏訪子から感じる神力は半端ではないな。

それでも俺の半分位の量しかないがな。

「へえ、ただの人間にしてはかなりの量だね。でも、力を抑えているなんて珍しいね」

「そんなに珍しいのか」

「そうだね。今では力を見せ付けている方が多いね」

俺は諏訪子の言葉からこの時代の世界観が大体理解した。

この時代は力こそ全てで、神様を中心に成り立っている事だ。

俺が修行している内にかなり変わったな。

「それより、自己紹介がまだだったね。私は守矢 諏訪子、ここの神様だよ」

「俺は玖珂 凌駕、ただの旅人だ。よろしくな、諏訪子」

「こちらこそ（あれ、何処かで聞いた事のある名前のような……）」

諏訪子がそう言った直後、庭から一人の村人がかなり慌てた様子でやって来た。

「諏訪子様、水葉様、大変だべ」

「どうしたんですか、そんなに慌てて」

「大和の奴等がまた来たんだつぺよ」

それを聞いた諏訪子は大きなため息をつき、外へと向かっていった。

その後に続く様に水葉も外へと向かった。

「すまないね、少し野暮用が出来た。凌駕は此処で少し待つて居てくれ。絶対に来ては駄目だよ、これはこの村の問題だからね」

そう言い終えると、俺の返事も聞かずに三人は村人を先頭にその場所へと向かっていった。

「来るな、と言われても気になるんだよなあ……まあ、様子を見るぐらいなら良いか」  
俺は立ち上がり、諏訪子達にバレないように後を着けた、と言つても木の枝に飛び乗りながら向かっているの、バレる筈がないがな。

「よつと」

俺はある程度村を見渡せる木に跳び移り、諏訪子達を探した。

そして、数秒で諏訪子を見付けた。

案の定、敵軍と何か話している様だった。

良く見てみると、敵軍の方に何人か村人が捕らわれていた。

しかも、女・子供を……………。

「取り敢えず、会話を聞いてみるか……………索敵」

索敵。周囲の地形、生き物、会話等を知ることが出来るスキルだ。

詳しく説明するなら、魔力感知に似たもので霊力でそれを行っているって感じだな。  
「えっと、何々？」

「人質を解放しな」

「なら、降伏をするんだな。まあ、今さら降伏した所で遅いかな。ガハハハッ」

そう敵軍の奴が言うのと、周りの奴等も笑い出した。

「この外道が」

「おっと、動くんじゃないぜ。コイツ等がどうなっても良いなら構わないけどな」  
「くっ」

「成る程な」

此方は人質を取られて手が出せない感じだで、奴等に言いたい放題言われているな。

それにしても……………

「奴等のやり方は気に喰わないな」

俺は様子見だけで済まそうとしたが、流石にこれは俺でもカチンと来たので、少し手を貸すことにした。

「瞬迅・烈」

あつという間に俺は敵軍のど真ん中に移動して、地面に手を当てた。

奴等は俺の事には気付いてなさそうだったので、そのまま能力を発動した。

すると、さつきまでそこに居た村人達が一瞬にして諏訪子の後ろへと移動した。

「一体、何が起きて……………」

敵軍・諏訪子等は何が起きたのか理解できずに戸惑っていた。

だが、敵は隊長らしき奴が仲間の奴等を落ち着かせ、諏訪子等は取り敢えず、人質が解放された事に安堵の表情をしていた。

此方としてはその方が手間が省けて有り難いかな。

さうして、反撃開始と行こうか。

まあ、俺がやるわけではないがな。



## 十四話 防衛大戦

敵軍は隊長らしき奴からの指示を受け、迅速な行動で弓で矢を放ってきた。

だが、それは諏訪子が地面に手を置くと地面が盛り上がり、矢を通さなかった。

これが諏訪子の能力なのだろう。

多分、地を操る程度の能力に近いものかな。

しかし、敵の攻撃はこれだけでは終わりではなく、盛り上がった地面を越して矢が飛んできた。

流石に、反応が遅れた諏訪子ではその攻撃を防ぐ事は出来ず、水葉も村人を全員守りながら、この量の矢を防ぐのは難しいだろう。

「つたく、しゃーなしだな」

俺はそう呟きながら、刀を取り出し抜刀の構えをした。

「黒刀流『鎌鼬の夜』！」

カチン、と刀を納めたのと同時に矢は粉々に斬られ、その場から落ちていった。

「あんだ等、次も同じ様に守れるか分からないから此処から離れとけ」

村人達は俺の言葉を聞くと、すぐさまにその場から離れ出した。

勿論、俺の言った事は嘘だ。

この程度なら、守りきる事は雑作も無いが、二人の事を考えると此処から離れさせた方が良いと判断したからだ。

それを見ていた諏訪子は村人達が離れたのと同時に敵軍へと向かっていった。

「よっ、大丈夫だったか」

俺は諏訪子が動いた後、水葉の元へと向かった。

「何とも無いですよ。でも、何で此処に来たんですか」

水葉は少し怒っている様に見えたが、俺は気にせず話を続けた。

「いやあ、本当は様子見だけで済まそうとしたんだけど、敵のやり方が気に喰わなくてな。つい、手をな」

少し冗談半分で答えたのが悪かったのか、水葉の機嫌が益々悪くなり、今にも爆発しようとしていた。

ハハツ、ちよつとやり過ぎたかな……………。

「はあく、もう良いですよ。過ぎた事ですし」

「へっ、良いのか」

俺はてつきり怒鳴り散らされると思っていたんだが、水葉は大きなため息を着いてソツポを向いてしまった。

てか、俺の予想は戦闘以外は外れまくりだな。

白夜の時もそうだったし……………。

「それに凌駕さんが来てなかったら、危なかったでしたし……………」

「んッ、何か言ったか」

俺が少し落ち込んでいる時に、水葉が何か言っていたが、俺はその言葉を聞き取れなかった。

「何でも無いですよ！」

何故か、今までで一番の剣幕でそう言われた。

アレ、何かまずった。俺……………。

まあ、茶番は此処までにして（水葉の方はそう思っていないだろうが……………）諏訪子の方へと目を向けた。

諏訪子は特に異常も無く、敵軍を半分近くぶっ飛ばしていた。

流石、神様って言ったところか。

てか、人間相手なのに容赦ねーな。

「んッ、何だアレ？」

まだ距離が合ってハッキリとは分からないが、高速で此方に向かっている事は分かった。

だが、そう思ったのも束の間、段々此方に向かってくるスピードが速くなり、それが槍だと理解した時にはもう遅すぎた。

「諏訪子ッ。今すぐ、そこから離れろッ」

俺は大声で諏訪子にそう言ったが、諏訪子自身も気付くのが遅く、槍の直撃は避ける事が出来なかった。

いや、例え早めに気付いたとしてもその場を動かなかつただろう。

この村への被害を抑えるために……。

諏訪子はその槍をギリギリで受け止め、少し後ろへと押されたが、何とかそれを上空へと軌道を変えた。

しかし、諏訪子は怪我を負い、かなり消耗している様に見えた。

だが、これだけでは終わる事はなく、何者かがその槍を空中で受け止め、諏訪子に向かって攻撃をしようとしていた。

「間に合うか。瞬迅・烈」

俺は今の諏訪子ではあの攻撃を防ぐ事は出来ないと思い、諏訪子を守るために動き出した。

ガキンッ、と槍と刀がぶつかり合い、俺は敵の攻撃を弾き飛ばした。

「ふう、何とか間に合ったな」

「ほう、ただの人間が私の攻撃を弾くとはな」

「一つ聞きたいんだか、コイツ等はお前の仲間じゃないのか」

諏訪子に槍で攻撃をしていた時、残りのほとんどの敵が巻き添えを喰らっていた。

「奴等は俺の駒だ。奴等がどうなろうと知ったことか。それに私の為に死ぬるなら本望だろう」

「てめえ、人の命を何だと思てやがる！」

流石に、私の言動にカチンときた。

俺は1割ほどの霊力を解放し、私に向かってそう言い放った。

「ほう、唯の人間がこれ程の霊力を持っているとはな。だが、私の前ではちっぽけなものよ」

私がそう言うと、俺の1割の3倍の霊力を出した。

流石は一応、神だな。

少なくとも諏訪子よりは、強いだろう。

「駄目だよ、凌駕。あんたでも私には勝てないよ」

諏訪子は俺の服の裾を掴み、そう言った。

横目で諏訪子の顔を見てみると、かなり不安な顔をしていた。

これはガチで止めようとしてるな。

「心配すんなって、すぐに終わらせるしな」

俺はそう言いつつ、諏訪子の頭に手をのせた。

諏訪子の方はまだ何か言っていた様だが、言い切る前に俺の能力を使って諏訪子の水葉のもとへと移動させた。

さてと、此処からは俺の独壇場だ。

「意外だな。てつきり、容赦なく攻撃をすと思つてたんだが」

「少しお前に興味が湧いただけだ。すぐに終わらせるがな」

そして、奴は槍を構えて鴉の様な黒い翼を広げ、戦闘体制へと入った。

此方も刀を抜き、刃先を奴へと向けた。

じゃあ、あの人の言葉借りて戦の幕開けとするとしよう。

「さあ、あんたの罪を数えろ」

「我に罪なんてないわあッ」

奴はそう言うのと、バカ正直に真正面から突っ込んできた。

この時代の一騎討ちは戦略や様子見無しでやるのか、と思いつつもまだ始まったばかりなので決めつけるのは良くないと思ひ、奴の実力をはかる事にした。

「まあ、これで良いか。雷閃流特式『雷斬りー雷閃ー』！」

俺は2発の霊力の斬撃を奴に向かって放った。

だが、槍を回し八の字に動かす事で、俺の攻撃を防いだ。

更に此方に向かうスピードが速くなり、一瞬にして俺の目の前までたどり着いた。

「さっきのお返しだ。連雅槍！」

奴は連続の突きをしてきたが、俺は避けたり受け流したりして攻撃を防いでいた。

この程度のスピードなら、片手で余裕だな。

「さっきまでの威勢はどうした。手も足も出ないのか」

そう言いつつ、奴は攻撃のスピードを速くした。

それでも、奴の攻撃は俺には届かなかった。

てか、さっきの台詞以前にも聴いた事があるような……………。

まあ、昔の事だし別に良いか。

「そうだな……………雷閃流『雷斬りー流電ー』」

俺は奴の攻撃を受け流し反撃をしたが、ギリギリで避けられた。

しかし、俺はこの隙に回し蹴りをした。

が、これもギリギリで避けられ、距離を取られた。

「弱すぎてあくびが出るな」

「人間ごときが我を愚弄するか。なら、我の本気の一撃を見せてやるわ」

奴がそう言うのと、神力を解放し槍にそれを込め始めた。

神力は今までの2倍となり、辺りが揺れ始めた。

そして、奴は準備が出来た様で此方に向けて槍を構えていた。

「これは天罰だ。神霊槍！」

そう言うと、槍を此方に向けて投げてきた。

それは物凄いスピードで此方に向かつており、相殺しても此処等一带、ただでは済まないだろうな。

等と考えていたら、諏訪子が何か叫んでいた様だったが、上手く聞き取れなかった。

まあ、今さら何を言われても止めないがな。

「つたく、仕方無いな」

俺は一度刀を鞘に戻し、槍の接近を待っていた。

そして、直撃寸前で槍を避け持ち手を掴み、右足を軸にしてその場で回転をし、力を込めて奴へと投げ返した。

「ガハッ」

槍は奴の体をいとも簡単に貫き、その場で倒れた。

あっさり喰らったけど、多分あの技の後には硬直状態があったのだろう。

俺は奴の元へと行き、首元に刀を当てた。

「たかが人間に殺られるとはな。だが我々、神は信仰が有る限り不死身だ。この屈辱は



忘れんぞ」

「それは良いこと聴いたな」

俺は一度、大きく深呼吸をして能力を発動された。

内容は勿論、『神殺しを可能に』だ。

「じゃあな、もう二度と会わないだろうがな」

俺はそう言い終えると、奴の首をはね飛ばした。

酷い断末魔と共に虚空の彼方に消えていった。

そして、一度刀を振り鞘への納めた。

「くっ」

かなり酷い目眩がし、身体中が悲鳴を上げているのが分かった。

これは暫くの間、能力は使えないな。

「取り敢えず、諏訪子達の所へ向かうか」

そして、俺は村の前にいる諏訪子と水葉の元へと歩いていった。

「何が起きて……………」

さっきまで凌駕の後ろにいたはずが、突然水葉の所に移動していた。

「諏訪子様、どうして此処に」

水葉も驚いている様だったが、それよりも凌駕を止めないと…………。

いくら人間離れした霊力を持っていても、人が神に勝てるわけがない。

「つツ!？」

「諏訪子様、動いては駄目ですよ。傷が深いんですから」

「でも、凌駕が……………」

「分かってます。ただ、諏訪子様の傷を治すのが先です」

そう言うとき水葉は回復の結界を張った。

すると、傷がみるみる内に塞がっていった。

流石に深い傷が治るのは少し時間が掛かった。

暫くすると、凌駕がいた方から物凄い神力が感じ取れた。

私はすぐ様に凌駕の元へと走り出していった。

「諏訪子様、待ってください」

水葉がそう言っていたが、足を止めず走った。

その場に着くと、敵はもう攻撃を放とうとしていた。

「凌駕ッ、逃げてーッ」

私は思いっきり声を上げたが、凌駕は此方の声には気付かなかった。

そして、敵の攻撃が凌駕に向けて放たれた。

私はもう駄目だと思い、その場に崩れ落ち涙を流していた。

しかし、予想外な事に凌駕はあの攻撃を素手で投げ返していた。

「えっ……………」

この時、私はふと思い出した。

何故、名前を聞いた時に思ひ出さなかったのか、その時の自分を殴りたい。

かつて、人々が月への移住を試みた時、大勢の妖怪が攻めてきた。

しかし、この時に三人の英雄が妖怪の進行を止めた。

そして、英雄の二人を月に向かわせる為、命を引き換えに最後まで戦っていた月の英

雄、名は玖珂 凌駕。

「もう、諏訪子様。まだ傷が完全に癒えてないのに動かないで下さい……………えっ」

水葉が驚くのも無理はない。

なんせ、普通の人間が神を圧倒しているのだから。

そして、凌駕は敵の首をはねてソイツの体は霧みたいに消えていった。

それから、凌駕は刀を鞘に納め、此方に向かって歩いてきた。

## 十五話 新たな真実

俺は悲鳴を上げている体を無理矢理動かし、諏訪子と水葉の元へと歩いた。

「諏訪子、怪我の方はもう良いのか」

「何とかね、それより聞きたい事が……」

俺は諏訪子が言い終える前に、取り敢えず神社に戻らないかと提案した。

諏訪子はそれを了承し、村へと戻って途中で村人達が諏訪子の周りへと集まってきた。

何か色々と言っていたが、要約すると感謝の言葉が多かった。

勿論、全て諏訪子がやった事にしておいた。

後で色々と言ったそうだしな……。

結局、神社に戻る頃には日が傾いていた。

これだったら、あの場で聞いとけば良かったな。

まあ、過ぎた事は仕方ないか。

「それで俺に何か聞きたいんだろう」

「そうだね、まずは月の英雄って知ってるかい」

「月の英雄?……聞いた事がないな」

俺がそう言うのと突然、凄いい勢いで水葉が話し始めた。

「凌駕さん知らないんですか!?! 月の英雄は大昔、月移住の為に妖怪達と戦った三人の人間の事ですよ。ですが、この話自体本当かは分かりませんが……」

「そう。水葉には言つてなかったが、そこには三人の英雄の名前があるんだ。そしてその中の一人、名を玖珂 凌駕」

「玖珂 凌駕つて、もしかして……」

「そう。あんたと同じ名前だ」

俺は顔を被う様に手を被せ、大きなため息をついた。

おいおい、何であの時の事がこの時代に伝わってるんだよ。

そもそも、全員月に行ったから不可能だろ。

いや、ツクヨミか……。

アイツなら、月の事を永琳辺りに任せて地上に降りて来そうだな。

よし、今度会ったら一発ぶん殴ろう。

「おい、凌駕。聞いているのか」

「あ……ああ、悪い」

俺は諏訪子の声で自分の世界から戻ってきた。

そして、俺はもう一度ため息をつき、話し始めた。

「確かにそれは俺だな」

「そうだとしても人がそんなに生きれるわけがないと思うんですけど……」

水葉が不思議そうに質問してきた。

まあ、不思議がるのも仕方がない。

外見はただの人間にしか見えないからな。

「それは俺の能力のおかげだ」

「でも凌駕さんの能力って空間系じゃないんですか」

「いや、それは俺の本当の能力じゃないんだ」

「それじゃ、あんたの本当の能力は何なんだ」

俺は一度、深呼吸をし暫くして話し始めた。

「俺の能力は『不可能を可能にする程度の能力』だ」

俺の言葉を聞いた二人は鳩が豆鉄砲を撃たれた様に固まっていた。

暫くして現実へと戻ってきた水葉が物凄い勢いで質問をしてきた。

「それって最強じゃないですか!?! それ所か神の力に匹敵しますよ」

「ま……まあ、少し落ち着けて」

俺は水葉が落ち着いたのを確認したので、話の続きを話した。

「この能力は強力だが正直言ってデメリットが大きすぎて使いづらいんだ」  
「で、そのデメリットって」

「簡潔に言うのと体に負荷が掛かる。もう少し詳しく言うなら使用時の内容によって変わる……って感じだな」

俺の話を聞いて二人はある程度、理解し納得をした様だった。

「それで凌駕は今までその能力を使って何を可能にした」

俺は適当な事を言っただけで誤魔化そうとしたが、後々面倒な事になると思い、正直に答える事にした。

「今の所、不老不死・超回復・神殺しの三つだな」

「えっ!？」

二人は最後の言葉を聞いた瞬間、瞳孔が限界まで開き、口をパクパクさせていた。

次いでに、超回復は地下の生活で覚えた。

その名の通り、回復力が馬鹿みたいに高いだけの力だ。

これのおかげで能力のデメリットからの回復が楽になった。

「えっと、二人とも大丈夫か」

「大丈夫なわけあるかーッ!!! 神殺しってどういう事なんだ（ですか）!!!」

二人は物凄い勢いで聞いてきたうえ、諏訪子は俺の両肩を掴み前後に激しく揺らして

きた。

「わ、分かったから……一旦、落ち着け」

俺がそう言うのと、二人は一度大きく深呼吸をした。

「少しは落ち着いたか」

「まあ、取り敢えずはね。それでどういう事か説明して貰えるかな」

俺は嘘偽りなく二人に話した。

神との戦いで発動したこと、体に相当負荷が掛かっていること、その他諸々だ。

次いでに、今まで地下で過ごしてきた事を話しておいた。

「その状態で大丈夫なんですか」

「正直に言っただけ今は意識を保つので精一杯だ」

「はあ、最低限聞きたい事は聞けたし、今日の所は休みな。あの部屋を使うと良いさ」

諏訪子は部屋のある方を指しながら、そう言った。

「ああ、そうさせて貰うよ」

俺は鉛の様に重い体を動かし、諏訪子が指した部屋へと向かっていった。

そして、部屋の中に入ると布団が敷かれており、俺はそこに横になった瞬間、意識がブラックアウトした。



## 十六話 水葉の修行

「知らない天井だ」

それもそうだ。

此処は今まで過ごしてきた場所ではないのだから。

それにしても、やけに右腕が重いな……と思ひ腕の方を見てみるとそこには諏訪子がスースーと寝息をたてながら、気持ち良さそうに寝ていた。

どうしてこうなった!?

いや、一旦落ち着くこう。

こういう時は深呼吸が一番だ。

すー、はあー……………つて落ち着けるか〜つ。

取り敢えず、起こしてみるか。

「お〜い、諏訪子〜。起きろ〜」

そう言いながら、俺は空いている左手で諏訪子の頬つぺたを突つついた。

何これ、めっちゃ柔らかいんだけど。

そして、暫く突つつかっていると諏訪子が起き始めた。

「ふうあく、凌駕。おはよう」

「お、おう。おはよう」

おいおい、この状態でよく挨拶が出来るな。

随分、凶太い神経をしているか、ただ単に寝ぼけているのか………。  
暫くすると、諏訪子の顔が真っ赤になり、布団から飛び出した。

「つて、何で凌駕がいるの!?!」

どうやら、さっきのは後者らしい。

「それは此方が聞きたいんだが?」

すると、諏訪子は何かを思い出そうと頭を悩ましていると、突然 諏訪子は赤かった顔が更に赤みを増し、ドタドタと部屋から出ていった。

「忙しい奴だな」

結局、諏訪子が何で此処で寝てたのは分からず仕舞いだ。

まあ、大体の予想は着いているのだから……。

「にしても、諏訪子の奴、何で顔が赤かったんだ? 風邪なのか」

まあ、考えても仕方無いか……。

「取り敢えず、日課のトレーニングでもするか」

そして、俺はこの部屋を出て中庭へと移動した。

(まずは素振りでもするか)

それから数十分、体を動かし続けた。

「ふう、まだ動きが鈍いが何とか動かせるな」

俺は一度 刀を鞘に納め、近くにあつた木に背を預けた。

暫く休んでいると、廊下的一端から水葉の姿が見えたので、水葉の元へと歩いていった。

「おはようございます、凌駕さん。もう体の方は大丈夫なんですか」

「ああ、おはよう。まだ少し体が鈍いが大丈夫だ」

「そうですか。それにしても、凌駕さんも修行ですか」

「んや、唯の日課だ……」も” って事は水葉は修行なんだな

よく見ると、水葉の右手にはお祓い棒が握られていた。

「はい。それで良ければ靈力の扱いを教えてくださいませんか」

「んまあ、別に構わないが」

「それでは早速、やりましょう」

そして、水葉は俺の腕を掴み、中庭の真ん中へと早足で向かった。

場所に着くと腕をはなし、俺の正面に向き直した。

「それで、俺は何を教えれば良いんだ」

俺がそう言うと、水葉は色々と答えてくれた。

率直に言うとか結界のアドバイスが欲しいとの事だった。

次いでに、結界についても聞いておいた。

てか、俺って結界を使った事がないんだが………まあ、何とかなるか。

「取り敢えず、その結界を見せてくれ」

「分かりました」

そう言つて水葉は自身の周りに結界を張った。

俺はそれを見ると、コンツコンツとドアをノックするように叩いた。

案の定、これは良い出来とは言えない。

強度は均等じゃないうえ、触れただけで霊力が揺れる。

「それでどうですか」

「ん………ああ、正直に言つて悲惨だな」

「やっぱり、そうですか」

水葉はかなり暗い顔をしていた。

それより、『やっぱり』って事は以前にも同じ事を言われたほいな。

まあ、折角だし少しアドバイスをしてやるか。

まずは俺は自身の前に、成るべく霊力が少ない障壁を張った。

「水葉、取り敢えずこれに攻撃してみろ。これを壊す勢いでな」  
「良いですけど、これならすぐに壊せますよ」

そう言つて、水葉は自身の前に霊力の玉を生み出し、障壁へと打ち出した。それが障壁に当たると小さな爆風を起こし、土煙を起こした。

そして、土煙が晴れると同時に水葉は驚きを隠すことが出来なかつた。

「えっ………どうして」

そこには障壁が残つていただけでは無く、障壁が無傷のまま残つていた。

「まさか、本当に上手くいくとはな」

永琳達と過ごしていた時の技術、シールドを真似してが中々上手くいったようだ。

まあ、これは俺が考えたわけでは無く、以前 依姫が俺の攻撃を刀でなくても防げる様にと考えたモノだ。

まあ、それがこんな所で役立つとはな。

「凌駕さん、何か言いましたか」

「いや、何でもない。取り敢えず、この結界の頑丈さは分かつたら」

それから、俺は水葉にこの結界について全て教えた。

初めは、納得するにも少し時間が掛かったが何とか理解して貰つた。

てか、この時代は『霊力の量が全て』みたいな感じだな。

靈力は量ではなく、扱い方が大事なんだがな。

「まずはこれぐらいの結界を張ってみろ」

そう言うって俺は手のひらより少し大きい立方体を創り出した。

「分かりました」

そう言うのと、水葉は早速 結界の練習に取り掛かった。

それを見た俺は、もう一度 木へと背中を預けた。

(そう言えば、今の時代はあの頃より戦闘力はかなり衰退しているな。下手をすれば、誤って殺つちまうかもしれないし、何か無力化出来る方法を見つけないとな。

あつ、もしかしたら結界を使ってアレが出来るかも……………後で少し試してみるか)

等と色々と考え事をしていたら、あつという間に10分程時間が過ぎていた。

俺は、少し水葉の様子を確認すると、彼女の手の上には俺が見せた結界よりひとまわり大きい結界があつた。

(ここから見た感じ結界は中々、良い感じだな。流星は巫女つて所か…………筋が良いな)  
俺は水葉の元に近寄り、話し掛けた。

「取り敢えずはそれを自分が守れるような大きさにするのが目標だな」

「フウー、そうですね。頑張ります」

そして、水葉は結界を解き俺にお礼を言ってきた。  
対した事は教えてないんだけどな……………。

まあ、次いでに攻撃面についても少し教えるか。

丁度、水葉に相性が良いものがあるからな。

「水葉、次いでにコレも教えてやる」

そう言つて、俺は辺りに微少な霊力を拡散し、それを全て同時に動かした。  
すると、あまり強くはないがそこそこの風力を生み出した。

「風……………もしかして凌駕さんが……………」

「ああ、多分 水葉にも出来ると思うぞ」

「ほ、本当ですか!?!」

目をキラキラと輝かせ、物凄い圧で聞いてきた。

取り敢えず、やり方を水葉に教えた。

「理屈は分かりましたが、かなり難しいですね」

「まあ、そうだな」

俺は簡単にやつて見せたが、アレ以上の事は出来ない。

正直に言つて、扱いがかなり難しいモノだ。

ゲームで言う難易度、expert（エキスパート）に当たるだろうな。

「あつ、そろそろ朝食の準備をしないと。それでは凌駕さん、私はこれで  
そう言って水葉は、中へと戻っていった。

俺はもう少し何か攻撃のレパートリーでも増やしておくかな。